
王様と喪女

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様と喪女

【Zコード】

Z0653BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとつて結婚しようと迫るが……？

よし、これが打ち終わつたら、すぐに家に直帰するわ。
わたしはそう心に堅く決めて、主任に頼まれた文書を普段の一割
り増しくらいの速度で、パソコンのキーボードを叩いていた。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

……そんなわたしの印象は、とても地味だ。

ファンデを薄く塗り、リキッド口紅を軽くつけたのみの化粧は、
よく言えばナチュラルメイク。

一応手入れはしているけど、眉も描いていないという手抜きぶり。
髪の毛もうねるくせつ毛を簡単に一つにまとめただけだ。

それに、会社の事務服があか抜けない水色のだぼつとしたものだ
というのも、わたしの地味さを更に強調していた。

だけど、わたしは作業員のおばちゃん達相手に、巻き髪したり、
つけまつげバチバチしたりする趣味はない。

そんな支度する暇があつたら、趣味か睡眠に当てたい。

そんなわけで、わたしはとつても垢抜けなかつた。

ただ、わたしに特筆するべきことがあるとすれば、大きすぎる胸
くらいだろう。これだけは、みんなに褒められる。

わたしにしてみれば、肩は凝るし、太つて見られるし、服選びは
大変だしであまりいいことはないんだけどね。

「只野さん。仕事あがつたら、みんなで飲みに行かない？」

「あ……、『めんなさい。今日は用があつて無理なんです。すみま
せん』

ちょうど金曜日の仕事上がり前といつともあつて、会社の営業
の相田さんという女性から誘いを受けたけれど、気乗りのしないわ
たしあはせつかくのお誘いを断つてしまつた。……本当は大した用は

ないんだけどね。

「只野さん、付き合い悪いよー」

「本当にごめんなさい」

相田さんは冗談めかして言つてくるけど、たぶん内心では氣を悪くしているだろ？。

この飲み会、本当はただの飲み会じゃなくて、実際のところわたしと取引先の結構お偉いさんを引き合わせるための場であることをわたしは知つている。

「あの子もこんな機会でもなきや、彼氏もできないんだから。それにあちらともこれからもい付き合いができるかもしないしね」うつかりというか、ラッキーというか、わたしが給湯室でお茶を淹れている時に、そのドアの前で相田さんが同じ営業の人と話しているのを聞いてしまったのだ。

なんでも、その取引先の人はわたしの胸が大きいのが気に入つたらしい。

……とすると、うちの会社に訪ねてくる度にわたしの胸のことを「相変わらず大きいねえ」とセクハラ発言してくるあの人だろうか。

……うん、やっぱり会いたくない。

会社のためなら、会つた方がいいのかもしれないけど、接待とか

苦手だし。わたしにはお茶出しどがせいぜいだ。

それに、お酒の席とかでごまかされて、胸とか触られたら最悪だし。

おまけに、男慣れしていないわたしが取引先の人につましく対応できることも思えない。

「なんだ、このつまらない女は」

なんて思われたら、ちょっと、いやかなりへこむかもしない。

それでもつて、もしかしたら円滑だった今までの取引先との仲も悪くなるかもしれない。

……いや、これは最悪の事態を想像しただけだけだ。

でも、相田さんのわたしへの心証は多少悪くなるかもしないけ

れど、それは仕事の方で挽回する」とにしようとします。

「そんなんだから彼氏もできないのよ」
相田さんに嫌みを言われたけれど、わたしは気にしないことにした。

これは何度もいろんな人に言われていることだつたからだ。

確かにわたしには恋人はない。というかこの歳まで彼氏がいたことはない。

いわゆるものでない女　喪女と云ひやつだ。
顔自体はそこまで悪くはない……と思つ。

ものすごいバスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔

はなかつた。

今までに異性を紹介してくれる相手がいたりした。

でも、わたしにはめんどくさい男女の関係よりも、もつと大事なことがあつたのだ。

わたしはあの後、主任に文書を確認してもらつてOKが出たところで、脇田もふらず家に直帰した。

趣味の漫画の下書きが予定したところまで終わりそうだったからだ。

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よろしかつたので、その事に浮かれ気味だった。

これなら呼めにサイトに載せられそうだー

よりは、時間の過ごし方としてはやつぱりこっちのほうが有意義だ。今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、わたしはそれが嬉しくて頑張ってサイトを更新していた。でもどこかの出版社に投稿する気はさらさらなかった。そんな自信もなかたし、ウェブ経由でいろいろな人に見てもらえるということにわたしは満足していた。……それは完全に自己満足っていうものかもしれないけれどね。

「しつかし、さすがに肩こったなー」

ジャージ姿のわたしは、自分の部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思つが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは今度のサイト更新分の下書きまで終わつた原稿と漫画道具一式を百均で買つてきたプラスチック容器にまとめるとい、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、わたしのもう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だつた。……まあ、あんまり他人に見せられるような趣味じやないよね。

預金通帳を見て、ニヤニヤする様は自分でも不気味かもしれないと思う。

しかし、その予定に反して、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめつた。

「いってえ～っ！」

一十七の女の叫び声として、「これはどうかと思うが、本当に痛いのでしょうかない。

人間、とつさの時にはつい地が出てしまつものだ。

だが、原稿一式は死守。

“死のあつても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうにか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまってあるし、あんなふうに散らばる「とはないはずなのに」。

「……おい」

わたしが舞い落ちる紙に見とれないと、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさりとした。……がなんだこれ。

「おい、やめるー。」

なぜかいかも高価そうな馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて呆然とする。

「どうだ、じいは。

さつ きまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い屋内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、いつしかせわざくろじやなかつた。

「いつたい、なに? なにが起つたの?」

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動していくなんてあり

えない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……これはもしかして、ひょっとしてひょっとすると、SFとかで言うなら海外とかにテレポート？
もし、ファンタジーならウェブ小説とかでよくある異世界トリック
�ってやつですか！？

高価そうな馬鹿でかい机の上からとつあえず降られたわたしは、田の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだが、どこから来た」

移動魔法とか言われても、よく分からない。

美形から魔法つて言葉が出たつてことは、やつぱりこれはファンタジーで、異世界トリップつてことなんだろうか？

わたしが言葉を失つていて、美形は「答える」と厳しく言つてきた。

田の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から來ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本で通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここがわたしが危惧したとおり異世界じやなければだけど。

「産業が工業中心の島国です。ジャパンとも呼ばれています」

「……ジャパン？ 島国？」

美形男は首を捻つてる。これでも通じないのか。

やつぱりここは、考えたくないけど異世界なんだろうか？

「……恐れながら」

今まで気がつかなかつたけど、近くには五十代くらいのおじさん

がいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルディアの最強の女魔術師がその国の出身だつたかと」
わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぽかんとしてしまつた。

「…………そうすると、その最強の女魔術師つて、日本人なの？」

「…………そうか。異世界召喚だというなら、いつも自然に言葉が通じるのは疑問だつたが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルディアに問い合わせなればなど呟いた。

「…………あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

異世界では言語が共通とかはないんだろうか。

「それはそうだろう。…………おまえはまったく行つたことのない大陸で話が通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまつた。

アメリカに行つて、日本語が通じないのと一緒にだ。

まあ、稀にハワイとかグアムみたいな観光地の例もあるけど、でもそれは特殊な例で、一般的には他の大陸で日本語は通じない。

「言われてみれば、そうですね」

「…………でも、なんで召喚されたのがわたし？」

こんな枯れた地味女じやなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「…………しかし、召喚されてきたのは分かつたが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい！」

美形に呻くようにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまつた。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだつたのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるつて……、再発行してもうえぱいいだけでは？」

なんだか嫌な予感をじわじわ感じながらもわたしは答える。

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもいいわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだつた。

「す、す、すみません！」

これつて、わたしがこの人の婚礼を駄目にしちゃつたつてことだよね。

わたしは頭を下げて美形に謝つたけど、こんなことでは許してもられないだらうな。どうしよう。

ちろりと美形を覗うと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言つたことで、わたしは許してもらえたのかと思つて頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思つてもいなかつた彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。今まで男とは無縁の生活をしていたのに、いきなり花嫁になれてなんなんだ！

「俺だつて嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まつていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

「この人がせつぱ詰まつていることは感じられたけど、やつぱり納得できないよ。

こんな美形なら、地位もありそつだし、女の子もよりどりみどりそつなの」。

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり訳も分からず俺の花嫁にされる姫が氣の毒だ」

はい？ この人今、姫つて言った？

姫つて、貴族とか王族の女の人がよね？

……そんな人を花嫁に出来る日の前のこの美形はいつたい何者なんだ。

「姫つて……、あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィイだ」

「ルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなつてくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメ派だ。

わたしは目の前の緊迫した状況を一瞬忘れて、とぼけたことを思う。

「違う。カ・レ・ヴィイだ」

すると美形が律儀にゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……つて、国王なんですか！？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィイ王が呆れたように溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかつた。

だつて、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれつて言われてるつてことじゃない！

だとすると、わたしは国王の結婚を駄目にしたつてこと…？
是非とも彼との結婚は拒否したいけど、なんといっても相手は王様。決定権はむこうにある。

下手したら不敬罪で投獄されちゃつたり、最悪の場合、國家同士の繫がりの機会を駄目にしたつてことで、極刑に処されたりするかもしれない。

あああ、まだ死ぬのは嫌だ。死にたくない。

今描いている漫画もまだ完結していないのに。

それなのに、なんでよりによつてわたしはそんな人の結婚を滅茶苦茶にしちやつたんだよーつ！

「お願いです。どうか殺さないでください」

「……俺は、なにもそんなことは一言も言つてないぞ」

わたしが王様に必死になつて頼むと、彼は啞然とした顔になつた。

……あれ、違うの？

いや、だつてさ。

わたしはこの婚礼の契約で生まれるはずだつた国と国の利益をぶち壊したんだから、展開的にはその場で殺されてもおかしくない立場だ。

だつたら、全くその可能性がないとは言えないじゃない。

「でもわたし、大事な契約書を駄目にしてしまつたし」

「だから、おまえが代わりに俺の花嫁になれと言つているだろ？」「わたしの言葉に対して、カレヴィ王は面倒くさそうに答えた。いや、でもそれはいくらなんでも投げやりすぎない？」

こんな地味で、政略的価値もないわたしを花嫁なんて、きっと国民も納得しないよ。

「国王の花嫁なんてわたしには無理ですって！」

それにわたしには王妃にふさわしい気品もなにもない。むしろがさつという言葉がふさわしい。

わたしは必死で訴えたけど、カレヴィ王の反応は冷たかつた。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「ええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィ王を見る。

一般庶民のわたしには、王様の伴侣なんて重すぎる。

それにわたしは美人でもなんでもないし。

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィ王の顔を見回してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「その格好を今すぐどうにかしろ」

王様にどうにかしろと言われて、わたしはとりあえずこちらの衣装に着替えることになった。

それに当たつて、わたしはお風呂に入れてもいいことになってしまった。

そしたら侍女の一人に大事に持つていた原稿一式を奪われて、わたしはちょっと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ゼッタイ、絶対だよ！！」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていただけれど、間違えて捨てられでもしたら困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしが侍女達に身ぐるみ剥がされるというピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまつたものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るものがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になつて一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。ちょっとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなったわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へ移動すると彼女達は一斉にわたしの体を洗い始めた。

「えええっ、ちょっと、ちょっとー！」

自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまつた。

……なんというかちょっと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

シャワーで全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂というか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねええと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がつたら、侍女の一人に台の上へ横になつてくださいと言われて、すでにやけくそになつていていたわたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサージを受けた。

あー、肩と首のこりがちょっと酷いんだよね、と言つたらやっこを重点的にマッサージしてくれた。うへへ、極楽極楽。

さつきまでの羞恥もどこへやらで、わたしはご満悦になる。

そうしていろいろ間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪

磨きとかしてくれた。

一度も行ったことないけど、Hステッテこんなのかなあ。
まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといってもタダだし。
……ここが異世界つてんじゃなら、もつといいんだけどね。

「それにしても、大きいのに形のよい素敵なお胸ですね」
侍女の一人が感心したように言つた。

うん、その点だけはみんなに褒められるよ。ありがとう。

「それに色白で、肌のきめも細やかで素晴らしいですわ」

まあ、日本人としては確かに白い方だけど、ここには白人の侍女
もいるし、これはお世辞だろうな。

それに、肌のきめ云々はわたしにはよく分からぬ。みんなこんなものじゃないの？

全身マッサージも終わって、ちょっと休憩と言つことで、出されたジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をいくつか出してきて、わたしは思わず噴き出しそうになってしまった。まさかと思うけど、それをわたしが着るのか？

もうちょっと地味な素材はないの？ せめて着る人に衣装は合わせて欲しい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれしかないらしい。ちえつ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だった。

……つーか、これを着るのか？ 普段、ダラケきつた生活をしているこのわたしが？

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでどうするわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装を着せられた。

お腹周りとか心配だつたけど、それはなんとか帯を巻いてしのい

だ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまとわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

こここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあ、ハルカ様、とってもお美しいですわー」「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、目の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせずに冷静だった。
確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。
さつきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。
だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよねー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまたカレヴィ王の前に連れて行かれた。

着替えさせられたわたしは、さつきカレヴィ王がいた部屋へ戻られた。侍女が言うにはそこは王の執務室らしい。

入室すると、そこに見知った人物がいたのでわたしはびっくりした。

だつて彼女がここにいるはずない。思わずわたしは自分の目を疑つた。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になつてゐるけど、でもやつぱり間違いない。

「ち、千花～っ！？」

「はるか、ひさしふりー。元気だつたー？」

幼なじみの千花に抱きつかれてわたしはちょっと呆然とする。千花とは小さい頃からの友達だけど、こんなことは聞いてない。まさに青天の霹靂だ。

「げ、元気、元気だけどー……なんで、ここに千花がいるの？」

今は確かに、結婚して外国にいるつて聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だつて聞いてなかつた？」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だつていうの？」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの？

「うん、そのまさか」

「うつそ、そんなことありなの？」

千花、いつの間にそんなことになつたんだ。

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思つけどー……」

千花はそう言つと、困つたように頬に手をやつた。なんというか、どうしたことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだつたのか？」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きにして見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思つたら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。」迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花はわたしから離れると、カレヴィイ王とおじさんに頭を下げる。「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルティアに睨まれてしまいます」

おじさんがどことなくにやけた顔で、それでも慌てて言う。……まあ、千花は友達の羨眞目を引いてもとつても美人なんだけれどね。

「……それについてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

綺麗な響きだけど、やっぱり聞き慣れないせいか違和感がある。

「うん、この大陸の人には千花って発音しにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごいな

い？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちょっと困った顔をした。

「うーん、はるかはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思つ」

「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言つんだから、事実なんだろう。

でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。向こうの世界ではそれでも珍しいことだもの。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィイ王が遠慮がちにわたしがたの話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だつて、いづれに堂々としている。ひょつとして、最強と言われるほど魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだらうか。

さつきのねじれたもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでたし。

すうご。すうごよ、千花。

わたしなんか、王様と向き合つて、命の危険まで感じて内心冷や汗ものだつたのに。

千花のこの肝の据わり方はマジでただ者じゃないよ。

「ハルカが突然現れることで、隣国の『ティアルスタン』王国の王女との婚礼契約書が滅茶苦茶になつた。最強の魔術師の力でどうにかならないか」

あ、そうだつた。

千花がどうにか出来るならわたしのしたことは不問になるよね。

そしたら、王様と結婚しなくてもいいし。

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりませんが、ティアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしとうことになりますが」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまつてある。どうしたらいい」

ええ、そんなにせつぱ詰まつてるの？

だから、わたしを代役にしようとしたんだ。

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込む。

その次に、千花の爆弾発言が投下された。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になつてもうつことになりますね」

「ああ、それでいい」

えええええつ！？

カレヴィイ王は簡単に頷いてるけど、ちょっと待つてよ、わたしはそんなこと納得しない！

わたしは驚いて思わず飛び上がってしまった。

「えええ、千花ちょっと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこいつなつたんじゃない。

わたしは千花に縋りついて抗議する。

「うん、本当にこめんね。でも、カレヴィイ王に酷いことさせないつて約束する」

それつて、結婚しても手は出させないってことだよね？

「いや、それより家に帰れないことの方が問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやってるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよね。それは残念ながらやめる」とになりそうだけ……」

それを聞いて、わたしは少なからずショックを受ける。

あああ、わたしの楽しい貯蓄生活が遠くなつていく……。

「そんなあ……。わたし、せつせと貯めた預金を確認するのが楽しみんなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはるの事務員つてことにするよ。給料も今よりははずむし」

「ええっ、本当に…？」

思つてもいられない千花の言葉に、わたしは色めきたつてしまつた。なんだ、そんなんだつたら大歓迎だ。

それにも、魔術師つてそんなことまで出来ちゃうの？

つていうか、会社設立つて、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィイ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする？」

千花にそう言われて、わたしは躊躇することもなく笑顔で頷いた。

「ええー、それなら結婚する！」

こんな素晴らしい機会を見逃すなんてこと、わたしには出来っこ
ない。……ああ、この先には充実した生活が待つていいんだね。
訪れるだらう近い未来を予想して、うつとりするわたしをカレヴ
イ王とおじさんが呆れた顔で見ていたけど、わたしはそんなことに
構つてなかつた。

……多少問題ありだけど、趣味に浸れるつゝです”く素敵じゃない?

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はつと我に返ったように言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないです……。その件については、わたしがどうにかしますから、カレヴィイ王はもう少しをお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。
うん、でもまあ、カレヴィイ王が言ったことはいく当たり前のことがなんだよね。

形だけの王妃なんて、もうつても困るだけだらう。
そしたら、わたしはおいしいだけの話に食らいついてちや駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも」

わたしが決意表明すると、千花は驚いたように瞳を見開いた。

「え……、はるか、本当にいいの？ もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうるたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人が出来る甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もうな可能性が高い。

……だったら、別にカレヴィイ王とそうなっちゃつてもいいんじやないかなって思うんだ。

わたしのその言葉に、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からぬ感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになつてゐると思つてゐるかもしない。

まあ、成り行きつちゃ成り行きだけど、結婚するんだつたら、こつちもそれ相応の義務を果たさなければ駄目だよね。

「はるかが〇Ｋなら、わたしが口を挟むことじやないよね。……でも、なにか困つたことがあつたらすぐにおこなってよ？　出来るだけ協力するから」

千花がわたしの手を取つて、それでも心配そうに言つてくれる。

うん、持つべきものはやつぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくていいや。……

今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィイ王がそこに割り込んできた。

「……話は済んだか？　ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かったぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言つと、カレヴィイ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？　てつきり二十歳そこそこかと……」

つていうことは、カレヴィイ王は今二十四なのか。

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じや嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知つているんじゃないのか？　王妃になるなら、清らかでなければならないぞ」

うんまあ、そう思つうのが普通だよね。

「ああ、それはないですから。わたしはとっても清らかですよー。なんといつても、わたしはもてない女ですから」

だから、その点だけは胸を張つて言える。

そしたら、わたしは事実を述べただけなのに、三人にものすゞく微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そ、うか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳といふことにさせてもらつ。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいんですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思つけど、王妃にするにほこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言つてた男を知つてゐる云々と言つてくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願ひします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対しても敬語もいらない」

今まで気が付かなかつたけど、この王様はかなり気さくらしい。この先の人生、ずっと付き合つていかなくちゃならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかつた。

わたしはほつとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かつた。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがなう、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか。「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ~っ

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ

「ごめん、こればっかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。うう、やっぱり駄目か。

王妃になるなら、それなりの気品を要求されることになるだろうから、たぶんその礼儀作法の授業は厳しいんだろうなあ。

……やっぱり、そうそううまい話は転がつてないよね……。

そう考へながら深く溜息をついてゐるわたしにカレヴィが言つてきた。

「取り急ぎおまえとの婚約の書類を作成するから、ハルカはそれに署名しin」

「うん」

カレヴィイからしたら、善は急げってことなんだろうなあ。
カレヴィイがさらさらと書いた『両名は婚約の契約をする事に合意
した』という文面に、わたしは彼のサインのあとに名前を書いた。
「 これで契約成立だな。ハルカ、おまえも慣れない環境で大変
だとは思うが頑張れ」

「うん」

いきあたりばつたりの政略結婚だというのに、わたしの心配まで
してくれて、カレヴィイなんだかかんだ言つてもいい人だなあ。
……うん、この人とならうまくやつていけるかもしねいなど、
わたしは少しだけ安心した。

婚約も決まったことだし、わたしは婚礼までに王妃らしく見える礼儀作法やこの国の歴史なんかを勉強しなきゃないかい、これから大忙しだ。

……漫画描いてる暇あるかなあ。あるといいけど。

「話がまとまったのなら、ハルカに俺の血縁の者を紹介したいが、あいにく父母は諸国を旅している。連絡は入れておくから、まあその内帰つてはくるだろう。後で弟を紹介する」

とりあえず今すぐ先王陛下や王太后陛下にお会いする訳ではないらしいと分かつて、心の準備がまだできていなかつたわたしはちょっとほつとした。

「ハルカが心配することはないよ。お一人とも気さくな方だし

千花がわたしの心配を察したかのように、フォローしてきた。

そうか、それならちょっと安心した。

でも一人、会わなきやいけない方が残つてゐるんだよね。

「……王弟殿下はどういう方なの？」

「シルヴィは今年十六になつた。少し気難しいところもあるが、まあハルカが心配することはない」

……でも、一応近い血縁なら、わたしの歳のこととか言わなきやいけないんだろうなあ。

それを若い殿下がなんと受け取るか、ちょっと心配だ。なんでも気難しいって言つし。

「ゼシリア、シルヴィを呼んでこい。こいつのは早い方がいいからな」

「かしこまりました」

いつのまにか控えていた地位のありそうな年かさの侍女がスカートを摘んでお辞儀をする。そして、王弟殿下を呼びに出ていつてし

まつた。

うわあああ、こ、心の準備が！

なんだか急に心臓がバクバクしてきたよ。

わたしが胸を押さえて深呼吸していると、それがおかしかったのか、カレヴィイが笑つた。

「そんなに堅くなるな。ティカ殿も言つたが、おまえはなにも心配することはない。未来の王妃として堂々としていればいいんだからな」

堂々って……、ついさっき決まつたことなのに、そんな無茶な。わたしが不安な面もちでカレヴィイを見ていると、彼はわたしの頭を撫でてきた。

……一応、わたしはカレヴィイよりも年上なんだけど……。

そんなことを思つてゐるうちに、ゼシリアと呼ばれた侍女が戻つてきて、程なくシルヴィ殿がお越しになられます、と伝えてきた。このゼシリアという人、結構地位がありそうだと思つたら、侍女長なんだって。

なるほど、どうりで妙な威厳があると思つた。

それからすぐに、シルヴィ王弟殿下が来られたといつことで、わたしは一気に緊張してしまつた。

執務室に入つてきた人は、カレヴィイと同じ銀髪と彼よりもやや薄い青い瞳の持ち主の少年というか、青年だつた。

褐色の肌のカレヴィイと比べて、色素は薄いらしく色白だ。

「お呼びですか、兄王」

十六という年齢にそぐわず、シルヴィ殿下はなんだかしつかりした印象を受ける。

後で知つたことなんだけビ、この大陸では十五で成人と見なされるらしい。

「ああ。この度、俺の婚約者となつた娘をおまえに紹介したいと思つてな」

カレヴィの言葉に、シルヴィ殿下は瞳を見開いた。

それに構わず、カレヴィは続けた。

「名はハルカ・タダノ。歳は二十歳といつゝにしてあるが、実は二十七だ」

わたしの実際の歳を聞いて、殿下は黙つていられなかつたらしく、少々怒りを含んだ口調で言つてきた。

「兄王、婚礼を挙げる予定だつたのは、ディアルスタンの王女では？　この方は他の大陸の方に見受けられますが。それに王の花嫁が二十七とはどういうことです」

確かに、彼の憤りは分かる。

それも兄の相手がこんな冴えない女なんだから。

「ティアルスタンとの縁談は残念ながら破談となつた。……だが、このハルカはティカ殿の友人だぞ。王妃とするのに不足はあるまい」

「ティカ殿の……」

そこでシルヴィ殿下が千花の顔をまじまじと見つめた。

それに対して、千花はなんだか氣乗りしなさそうに頷いている。

……ああ、そうか。

それでわたしは氣がついてしまつた。

わたしを王妃にとカレヴィが言つたのは、最初は腹立ち紛れからだつたからかもしれない。けれど、途中でわたしとの結婚に乗り気になつたみたいのは、わたしが千花と友達だつたからなんだ。たぶん、わたしがカレヴィと婚礼を挙げれば、千花はわたしのために最強の女魔術師としてこの国に協力することになるのだろう。

……そつか。

別にわたし自身が必要とされてる訳じやないと分かつてしまつて、わたしあはなんだかがつくりしてしまつた。

そりやそうだよね。

わたしには王妃にふさわしい美貌も気品も教養もないもの。でも、元々が喪女だつたわたしだ。

わたし自身に期待されることは慣れきつていてる。

それでなんとかわたしは気力を持ち直すと、笑顔でシルヴィ殿下に手を差し出した。

「はるかです。よろしくお願ひします、殿下」

「うちの礼儀作法はよく知らないので、彼に笑顔で握手を求める」と、困惑しながらも殿下は素直にわたしの手を握り返してきた。

「それとわたしはどうが立つてますが、一応清らかなので王妃となるのは大丈夫ですよ。わたしはこれまで男性にモテなくて恋人もいませんでしたから」

それを聞いて、シルヴィ殿下がなんとも言えない顔をした。
あれ、わたしまた変なこと言つたかなあ。

そしたら、カレヴィイが渋い顔をしてわたしに言つてきた。

「ハルカ、そんな余計なことは言わなくていい」

「え、そう？ 結構重要な事実だと思うんだけど」

わたしがカレヴィイにそう言つていると、シルヴィ殿下は困惑したように言つた。

「そ、そうですか。それでは俺のことはシルヴィと呼んでください。それから、あなたの義弟になるわけですから、兄王より丁寧な言葉遣いでは困ります」

「あ、そうだね」

彼の言つことももつともなので、わたしはあっせつといつもの言葉遣いになる。

……じゃあ、お言葉に甘えて、彼のことはシルヴィと呼ばせてもらおう。

「それじゃ、よろしくねシルヴィ」

わたしがにっこり笑うと、それまでいくらかうろたえていた彼がほほとしたように笑つた。

……うーん、可愛いな。

実はわたし弟が欲しかったんだ。

彼とは仲良くなれるように、暇を見て時々会いに行こう。

そんなことを考えて、にこにこしているわたしに、カレヴィイがい

きなりの爆弾発言を発してきた。

「それでだな。挙式の予定だが、一ヶ月後とすることにした」

ええっ、それっていくらなんでも早すぎない？

礼儀作法のこともあることだし、せめて三ヶ月は余裕を見てほしいんだけど。

でも、國民に近々挙式するつてことを知らせてあるんじゃやつぱり駄目なのがなあ。

……やっぱり、わたしうまい話に食いつきすぎたかもしれない。

などと思つても、後悔先に立たず。

ちょっと心配そうな千花の視線を受けながら、わたしはひきつり笑いをしていた。

「そんなに早く？ ちょっと早すぎない？」

この奇妙な状況を両親に説明して、会社も辞めなきやならないわ
たしはカレヴィイに食い下がつた。

「……なにか困ることでもあるのか？」

カレヴィイが眉を上げて見てきたので、わたしは素直に伝えた。
「会社をすぐに辞められるか分からぬし、そんなに急に王妃にな
るもの、わたし自信ない」

できれば円満退社にしたいし、一ヶ月やそこらで礼儀作法が身に
付くとは到底思えない。

「はるかの不安は分かるよ。準備するにもちょっと期間が短すぎる
ものね。……カレヴィイ王、その辺りはどうにかならないのですか？」
わたしのこぼした不安に千花は頷いた後、カレヴィイに交渉してく
れる。

「期間が短いことは分かっている。だが、国民に婚礼が間近にある
ことを知らせてしまつては、なるべくなら日程は変更したく
ない」

「……そつか、そうだよね」

カレヴィイにはつきりと断られてしまつて、わたしはちょっとがつ
くり。やつぱり駄目かあ。

「悪いが、式は予定通り行う。なんならおまえの勤め先には俺から
説明するが」

「え……」

カレヴィイの思つてもみなかつた申し出にわたしは目を見開いた。

いやでも、みんなにカレヴィイなんて言つて説明するの？ 真実を
正直に話したら正氣を疑われかねないし。

「でも本当のこと話をわけにはいかないでしょ？ そこはうまく
脚色とかないと。それにカレヴィイ、向こうのこと全然知らないで

しょ？ そんなんでうちの上司説得するとか無理があるんじゃないかな」

わたしがそう言つと、ちょっとカレヴィはむつとした。

ありや、機嫌をそこねちゃつたかな。

カレヴィが好意で言つてくれてるのはよく分かるし、それはすぐありがたいよ。

せつかくこう言つてくれてるのに悪いけど、でもカレヴィを職場に連れていくのはやつぱりやめた方がいいかもしないと思うんだ。千花はそんなわたし達の様子を窺いながら顎に指を当ててなにかを考えているようだつた。そして、おもむろに口を開いた。

「それなら、わたしも付いていつてその都度カレヴィ王に遠くから指示することにすればいいんじゃないかな？」

おお、それはいいアイデアだ。千花、ナイス。

カレヴィもそれはわたしと同じだったみたいで、納得したように頷いた。

「それはいい考えだな。ティカ殿、ぜひ頼む」

……となると、カレヴィを職場に連れて行かなきゃいけないんだよね。

うーん、でもそれって、わたしこんなイケメンと結婚するんです！ つてみんなに見せることになるんだよね。

今まででなかつたわたしが突然イケメンを連れていつたうどうなるか、想像しただけでも恐ろしい。

できればカレヴィが出てこない方向で、上司にわたしの退職を納得させたいけど、たぶん無理だろうなあ……。

そう考えてわたしがちょっと息をついていると、カレヴィがわたしの肩を励ますように軽く叩いた。

「そういうことだから、ハルカは安心している。ティカ殿の協力もあることだしな」

わたしの溜息を不安感からのものと勘違いしたらしいカレヴィは笑顔で言つてくる。

「う、うん」

仕方なくわたしが頷くと、それまで黙っていたシルヴィも後押しするようと言った。

「兄王がいつも言っているのです。ハルカはもう少し気持ちをゆったりと持つて兄王に任せなければいいんですよ」

「う、うん……」

未来の義弟にまでいつ言われちゃもつ反論の余地もない。わたしはまた頷いた。

ああ、できれば穩便にことが済めばいいなあ、とか思つてたけど、これはちょっと無理っぽい。

けど、自分で決めたことだから仕方ない。

千花もわたしのために動いてくれることだし、ここは頑張ろ。とりあえず、その前に両親にカレヴィとの結婚を知らせる難題が待ち受けているけどね。

そして、カレヴィの王妃になることが決まったわたしには、彼の部屋の隣の王妃の間が与えられることになった。

まあ、隣と言つても間に共同スペースみたいなものがあつて、王と妃が一緒に過ごすときはそこを使うらしい。

この大陸ではどここの国の王宮もこの作りだと千花に教わった。千花はその能力でいろんな国に行つていろいろなことを知るに当たつて、すごくいい先生だ。

「はるか、今日は積もる話があるから泊まつていきたいんだけどいい？」

千花がそう言つてきたのをわたしは喜んで受け入れた。

ああ、ひさしひに千花とお泊まりか。千花のこれまでの生活のことも聞きたいし、すごくわくわくする。

すると、なぜかカレヴィが渋ってきた。

「なにも俺の婚約者になった今日でなくともいいだろ。ティカ殿

とは別の機会に……」

「カレヴィイとはまだ結婚してるわけじゃないんだからそのくらいいいじゃない。本当に千花とは久しぶりに会ったんだから、たくさん話したいことがあるし」

「しかし、今夜は……」

そう口を挟んできたシルヴィイをカレヴィイが片手で押しとどめると、仕方なさそうに溜息をついた。

「仕方ない、今夜だけだぞ」

「あ、ありがと。それで、明日は次の日に会社に行くから家に泊まるね」

そう言つたら、なぜかカレヴィイがひきつったような顔をした。そして、それをシルヴィイが気遣うように見ている。

あれ、なんかまずいことでもあるのかな？

「……どうかした？」

千花もそんな二人の様子を不思議そうに見ている。

「いや、なんでもない。明後日にはハルカはこちりに住むところとで間違いないんだな？」

「うん」

……まあ、会社の上司の説得がうまく行けばの話だけだ。

とは、思つてもわたしは口に出さなかつた。

それを言つたら、千花のお泊まりがなくなりそうな予感がしたからだ。

カレヴィイ達の様子はちょっと氣にはなつたけど、わたしは目の前の千花とのおしゃべりのことで頭がいっぱい、すぐにそれを忘れた。

……ああ、本当に楽しみだなあ。

これから氣の重い両親と職場の説得が待ち受けているんだし、とりあえず楽しいことで気を紛らわそう、うん。

それでわたしは今、わたしにあてがわれた寝室に千花といった。で、二人とも寝間着に着替えて、一緒に天蓋付きのベッドの上に座り込んでいる。

絹の寝間着は千花の綺麗な体の線を露わにしていて、友達のわたしでも惚れ惚れする。

出るところは出てて、手足は細くて長いっていいなあ。格好いい。

「……まず、はるかに謝らなきやいけないことがあるんだ」

千花が改まってわたしに向き合ってきたので、わたしはちょっとうろたえる。

「な、なに？」

「召喚の座標指定を失敗したっていうのは実は嘘なの。わたしは、わざとあそこにはるかが現れるようにじ向けたの」

「え……」

にわかには信じがたい話に、わたしの頭が理解を拒否する。

「うそ……」

じゃあ、千花がわざとわたしとカレヴィイが結婚するようにじ向けたつてこと？

「本当にごめんなさい！」

千花はベッドの上で土下座する。対するわたしは信じられない事実に呆然としているだけだった。

「な、なんで……？」

とりあえずそれだけ絞り出すと、千花は顔を上げた。

「今回カレヴィイ王と結婚する予定だつたディアルスタンのリリーマリー王女は既に想い人がいたの。それは王女の守護騎士なんだけど

なになに、王女と騎士の恋！？

それに対するわたしの反応は素早かった。なにを隠そう、今わたくしが描いている漫画は騎士と姫君の恋物語だ。なので、わたしはその話にものすごく興味を引かれてしまった。

「詳しく述べて」

わたしは千花に詰め寄つて肩をがしつと掴むと、田を輝かせて彼女を覗きこんだ。

千花はそれに若干引き気味になりながらもちゃんと説明してくれた。

「王女の守護騎士の方も、彼女を憎からず想つていてね。そのうちディアルスタン国王に思い切つて結婚したいと申し出るつもりだつたらしいの」

「あらー……」

わたしは思わず氣の抜けた声を出してしまった。

だつて、それじゃカレヴィ、思い切り邪魔者じゃない。

物語的にはおいしいけど、ディアルスタンの王女と騎士はさぞ焦つただろう。

下手したらそれつて、一人の愛の逃避行フラグだよ。

「でも、王の方はそんなことは全く気づいてなかつたから、王女とカレヴィ王との婚約話を進めちゃつたのよね。カレヴィ王も今まで執務に明け暮れてたけど、重臣達にせつつかれて、そろそろ結婚しないとまずいと思つたらしくて、その政略結婚を決めたらしいのね」

「政略結婚かあ。よく知らないわたしに結婚しろつて言つてくるくらいだもんね。それくらい平氣でするよね」

まあ、あの時のカレヴィは、ほとんど決まりかけていた婚礼を目の前で駄目にされて頭にきてたんだろうけど。

それにしても、カレヴィは王女がどんな人物でも一向に構わなかつたつてことか。わたしはその王女じゃないけど、なんか失礼だな。わたしも人のことは言えないけど、本当に恋とか愛は必要ないんだな。結婚するはずだった王女が可哀想だ。

……けど、王なんだから、結婚するに当たつて相手のこと少しく

らい調べない？

そうすれば、王女とその騎士が恋仲なくらい分かりそななものだけ。

そしたら、さすがにカレヴィイもリリー・マリー王女と婚約しようとはしないはずだ。

「それで今回、リリー・マリー王女からわたしにどうにかしてほしいって依頼があつて。けど、あまり時間がなくてどうしようかと思つてたんだけど、婚礼契約書にカレヴィイ王がサインしなければこの結婚は成立しないことになるのよね。それで、そこに印を付けたの」

「……それはわかつたけど、なんでそこにわたしが召喚されるの？」
「突然召喚されてきたことには、契約書が滅茶苦茶になつても不自然じゃないかなと思って。それにはるかなら、カレヴィイ王とうまくいくかも知れないなつて思つたし」

「ええつ？ 千花、なに言つてるの？」

いきなり千花が妙なことを言い出したので、私はびっくりする。わたしとカレヴィイならうまいくかもつてなんだ。仮にもカレヴィイは王様で、わたしはただの一般庶民（それも喪女）だぞ。

悪いけど、それは千花の思い違いじゃない？

「二人とも自分の恋愛には頓着しないタイプじゃない。愛のない結婚が耐えられない人もいるけど、その点、はるかなら大丈夫だと思つたし。だから、わたしはその可能性にかけたの」

まあ、確かに結婚に夢も希望も持つてないけどね。千花、鋭すぎる。

「でも、本当にカレヴィイ王に手を出させつたりはなかつたんだよ？」

「それだけは信じて」

まあ、それだとカレヴィイが可哀想すぎる気もしたけど、最強である千花なら可能なんだろうな。

「うん、分かつてゐる。……千花、もしかしてわたしの行く末も心配してくれてた？」

わたしがそう言つと、千花はちょっとうるしたえた。……図星があ。

確かにわたしも一生一人でも別にいいと思つてはいたけどね。

そうか、我が道を行くわたしは、そんなに千花に心配をかけてたのか。ちょっと反省。

「……恋愛面はともかく、カレヴィ王は悪い人じやないから。はるかが不幸になることはないと思つたんだ。本当にごめんね、はるか」

そう言つと、もう一度千花は深々と頭を下げた。

「別にいこよ、千花がわたしのこと心配してくれてるの分かつたし。千花はこのこともう気にしないで。……それに生活面もものすごく保証されてるしね」

いたずらっぽくわたしが笑つて言つと、千花は安心したように息をついて、「うん」と頷いた。

千花によると、わたしとカレヴィがある程度打ち解け、お互に信頼関係が築けたところで本当の意味での結婚生活を送つてもう少しが計画だつたそうだ。

でも、どうしても反りが合わなそうだつたら、婚約話を白紙に戻すつもりだつたとも言つていた。

……でもそれだと、わたしに話が有利すぎない？ なんだかカレヴィがいいように利用されてるみたいでちよつと可哀想な気がする。カレヴィも、わたしを娶ることで千花の力を借りようつていうんだからお互い様かもしれないけどさ。

でも千花のわたしに対する気遣いは、わたしの「子供産んでもいいよ」発言で無になつてしまつたわけだけど。

千花の気持ちは嬉しいけれど、やっぱりこうのうのはフュアに行かないとな。

翌朝。千花とわたしとカレヴィは一緒に朝食をとりながら、これからのこと話をしていた。

「とりあえず、一回家に帰つて事情を話しておきたいんだけど。会社にも辞めるつて言わなきやいけないし」

「あ、そうだね。それがいいよ。わたしもはるかの家にお邪魔するから」

千花がわたしの言葉に同調してくれたことと、わたしはちょっとと癖のある両親の説得に千花といつ味方を得られて、かなり心強かつた。

うちの両親は千花の言つことならたぶん信用するだらうし、それにこざといつときには千花に魔法を披露してもらえばいいだらう。「うん、そうしてくれると助かる」

いきなり異世界の王様のところに嫁にいくつて言つたら正氣を疑われかねないから、千花が同行してくれるのは本当に助かった。

「……俺も行かなくていいのか？」

カレヴィイは執務とかいろいろ忙しいらしいんだけど、でもわざわざそう言つてくるのは、かなり気を遣つてくれてるんだろうな。「どうしても必要だつたら出てきてもらうかもしぬないけど、今のところ大丈夫だよ。うちの両親はここに直接来てもらつて理解させるつもりでいるし」

彼氏もいなかつた娘が異世界の王様と結婚するなんて、普通だったら到底信じてはもらえないだろうけど、そこは千花がいるし、大丈夫だよね。

「……問題は会社かなあ」

わたしは焼きたてのパンにバターを塗りながら溜息をつく。

「そうだね。いきなりやめます、はい分かりましたつて訳にはいかないものね」

千花もスクランブルエッグをフォークですくいながら同意した。

「うーん、急ですけど外国に嫁ぐことになりましたつて言つたら、認めてくれるかなあ。一応他の子になにかあった時のために仕事内容は教えてはあるんだけど」

ていうか、結婚すること自体信じてもらえないそな気がするの

は、わたしの気のせいだろうか。

なにしろ、わたしがもてなくて彼氏もいなかつたことは職場に浸透しているしや。

「ではそこで俺を呼べ。必ず認めさせてやるから」
おお、力強いお言葉。カレヴィイがそう言つと、なんとなく可能な気がしてくるから不思議だ。

「そう? じゃあ、そうしようかな。カレヴィイ、その時はお願ひね」「ああ、まかせておけ」

そう言つて爽やかに笑う顔はマジでイケメンで、なんで結婚相手が喪女のわたしなんだと思わざるを得ない。……まあ、手近にいたのがわたしで、たまたま最強の魔術師の千花の友人だつたからとうのは理解はしているけど。

でも感情面ではいかんともしがたく、なんとなくもやもやしつつも、わたしはとうあえず帰宅することにした。

千花の異世界移動魔法で「あらの世界の自分の部屋に移動してきましたわたしは、まず適当な服を選んで着替えた。

昨日いなくなっていた間、千花の家に泊まっていたことにするためだ。

言い訳するのに、いくら外見に頼着しないわたしでも、さすがにあのよれよれのジャージで外出はしないからそうしたんだけど、着替えてる間、千花はわたしの汚部屋を整理整頓してくれた。……う、ありがたい。

それで改めて着替えたわたしは、家の鍵とバックを持つて家の外に千花の魔法で移動した。

……家にいるのに、また外から入るつてのも、なんかすごく間抜けな感じがしないでもないけど仕方ない。

おとんとおかんにはわたしが昨日いなくなつてたのは分かっているだろうし、ちょっと情けないけどこれは苦肉の策だ。

「……ただいま~」

家の鍵を開けて中に入ると、リビングからおかんが飛びってきた。

「……はるか?」

「おお、素早いな。……」応わたしがこと心配してくれてたんだどうか。

「連絡もしないで、今までどこ行つてたの。携帯は通じないし、まったくあんたつて子は。頼みたい用事がつたのに」

「なんだ、結局わたしよりもその用事の方が大事なのか。

おかんからのこついう仕打ちは幼少から受けているけど、やつぱりちょっと落ち込む。

「まあ、いい加減、わたしもこついう人なんだと理解して受け流せばいいんだけどね。」

でも、理性では分かっていても感情が付いていかなことってあるでしょ？

それがまさここの時プチ爆発して、わたしはむつとしてしまった。

おかんの上からの物言いにわたしが黙り込んでいた、そこで千花がフォローを入れてくれた。

「おばさん、お久しぶりです。すみません、はるかはわたしの家に泊まつてたんです。心配をおかけしてすみませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げて謝る千花を見て、おかんは驚いたようだ。まあ、千花は結婚して外国に行つてることになつてからね。

「まあ、千花ちゃん、また綺麗になつて。いつ帰ってきたの？」近所でも美人で出来がいいと評判の千花に久しぶりに会つて、おかんはころりと機嫌がよくなつた。

……ちょっと、ぐれてもいい？ それには十年ぐらい遅すぎる貰もするけど。

「つ、タベです。それで、はるかに会いたくていきなり呼び出しちゃつたんですけど、本当にすみませんでした。だから、はるかは全然悪くないです」

「まあ、それじゃしようがないわね。でも、はるかは今度からそういうときは連絡入れときなさいよ」

「……分かった」

おかんの小言に内心うんざりしつつも、ここで逆らつとまたうるさいので、とりあえず頷いておく。

「ち、千花ちゃん上がって、上がって。すぐにお茶出すから」

おかんは上機嫌で千花を促すと、「お父さん、千花ちゃんが帰ってきたわよー」とリビングに戻つていった。

……なんていうか、娘のわたしと千花との扱いの差が激しそう。確かにわたしは出来の悪い娘だけどさ。

「……おばさん、なんというか相変わらずだね……」

千花が同情するように言つてきたのをわたしはただ苦笑いして受

け止めた。

改めて自分の評価を親に突きつけられた氣がして、非常に情けなかつた。

「……それについても、『ごめんね。わたしが召喚したせいで、いろいろ迷惑かけて。おばさん達にも心配かけちゃったし、すぐに帰せばよかつたね』

千花が眉を下げる申し訳なさそうにわたしに謝つて來た。
美人の千花にそんな顔をされると、こっちが悪いことをしたよう
に思えてくるから不思議だ。

「別にいいよ。うちの親がいい歳した娘を干渉すぎるんだよ
……とはいって、連絡の一つもすればよかつたな。

携帯の電波くらい千花ならどうにかできただろうし、それは失敗
だつたなと思つ。

まあ、過ぎてしまつたことは仕方ない。次は氣をつけよう。
「それより、千花上がつてよ。千花には説明頑張つてもらわないと
いけないし」

そうなのだ。

情けないことに、わたしでは通常の結婚話すら信じてもらえない
可能性が高いので、千花の存在は不可欠なのだ。

「うん、お邪魔します」

千花は頷いて玄関を上ると、わたしの後に付いてリビングに入
つた。

「おじさん、お久しぶりです」

千花はおかんに比べるとちよつと影の薄いおとんに笑顔で挨拶し
た。

千花のその様子はとても爽やかで感じがいい。

「千花ちゃん、久しぶりだね。元気だったかい？」

「はい、おかげさまで。タベははるかをお借りしちやつてすみませ

んでした

「うん、いいんだよ。じつこいつがないことは家にひきこもつてゐるんだから」「うん

……おとんもなにげに毒舌だよね。それにしても、どれだけ親の評価低いんだ、わたし。

わたし達はとりあえず、リビングのすぐ傍のダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいた。

千花はおとんとおかんに外国での生活についていろいろ聞かれていたけれど、そのうちにわたしは業を煮やして無理矢理話を遮った。

「あ、あのさ、実は大事な話があるんだ

「なに、まさか会社辞めたいとかじゃないでしょ? うな。この不景気に冗談じゃないわよ」

う、いや、それも含まれてはいるんだけどね。

わたしが「」もると、おかんの目がつり上がる。

おかんがなにか言おうとする前にわたしは慌てて言った。「じ、実は今度、わたし結婚することになったんだ

すると、おとんとおかんがうろんな目でわたしを見た。

……まあ、今まで男の影がなかったわたしの言つことを一人が信じられなくとも仕方ない。

「本当です。あの変なことを言つと思われるでしょ? うど、聞いてください。はるかは異世界の王様の花嫁になることになりました」この近所の人の評価が抜群に高い千花のその言葉に、おとんとおかんの目が点になった。

「あの……、千花ちゃん? どうしちゃったの? はるかならともかく、千花ちゃんがそんなこと言つなんて……」

わたしならともかくって、どういう意味だ、おかん。

いくらファンタジー漫画を描いているわたしでも、現実と空想の区別くらいはついているぞ。

「信じられないのも当然ですね。……実はわたし、その異世界で魔

「術師をしています」

見てください、と千花は言つと、その手から明るい球体を出した。……もしかして、これが昨日千花が言つてたあかりを灯す魔法なのかな？

千花はふわふわ浮かぶその球体をいくつもその手から出した。それをおとんとおかんが釘付けになつて見ている。

「……千花ちゃんは手品師なのかな？」

おとんが間の抜けた顔で聞いてくる。まあ、魔術師＝手品師と受け取つても不思議じやない。

「違います。言つなれば、魔法使いですね。……よく見ててください」

千花はあかりの魔法を消してから椅子から立ち上がると、瞬間的にリビングにあるテレビの傍に移動した。

それをぽかんとして見る、おとんとおかん。

……まあ、信じられなくとも無理はない。わたしもこんな事態にならなければ、到底信じられなかつた。

千花はまた瞬間的にテレビの傍からもう一度元の場所に戻つてくる。

それをおとんとおかんは少し恐怖の入り交じつた目で見ていた。

「……信じていただけましたか？」

その視線に少し寂しそうな笑顔で千花は尋ねる。

「そ、そんな馬鹿なことが……」

おとんが千花に事実を突きつけられても、まだ信じたくないというように呟いたけど、千花がそれに対して強く頷いて言つた。

「あるんです。これからその王様のところに移動してもらいますが、玄関で靴を履いてもらつていいでしょうか？ できれば出かける支度をしていただけるといいんですけど。あと戸締まりもしてください

い

「あ、そうだね。ガスの元栓も閉めとかなきや」

呆然としているおとんとおかんを後目に、わたしは家の戸締まり

を開始した。

二人は呆然として今は使いものにならないし、わたしが率先してやるしかない。

「おじさん、おばさん、信じられないかもせんが、これは本当のことです。すみませんが、準備してください」

千花がおとんとおかんに向かって右手を広げると、二人はふらふらと自分達の部屋に行き、よそ行きの服に着替え始めた。

……もしかして千花がなにかしたのかもしれない。

おとんとおかんは玄関で靴を履いたところで我に返つたようだつた。

すっかりよそ行きの格好になつている自分達におとんとおかんはうろたえた。

「……これはいつたい……」

「千花ちゃん、どうなつてゐるの、これ」

「すみません、説明は後で。……はるか、行くよ」

「うん」

千花に促されて、わたしも慌てて靴を履いた。

……しかし、さすがに四人も玄関にいると狭い。

けれど、それを気にする様子もなく、千花は短く何事かを唱える。すると、その次の瞬間にはわたし達は豪華絢爛な広間に移動していた。

ザクトアリアなのは分かるけど、えーと、「……はどうだるや……？」

010 カレヴィとの面親の謁見

千花に連れられて来たといひは、今まで一度も見たことのない場所だった。

……まあ、もつともカレヴィの執務室と居室、その間の共同空間と王妃の部屋くらいしかまだ行ったことないんだけどね。もう少しわたしもこの王宮の間取りを覚えた方がいいかもしだい。

とは言つても、この中はとんでもない部屋数らしいんだけじね。でも、所要な施設の場所くらいは覚えた方がいいだろつ。

「来たな、ハルカ」

その声のした方を見ると、一段高くなつたといひにある豪華な椅子にカレヴィが悠々と腰掛けていた。ひょつとしてあれは玉座だろうか？

「ここは……？」

わたしが疑問を口にすると、おじさん改め、宰相のマウリスがそれに答えてくれた。

「ここは謁見の間ですよ、ハルカ様」

言われてみれば、確かにそれっぽい。わたしはなるほどと納得した。

「この謁見の間は絢爛豪華ではあるんだけど、不思議と下品な感じはしない。それは所々置いてある品のある調度品のおかげかもしない。

「ハルカ、そちらにいるのがおまえの父母か？」

玉座の上からカレヴィが声をかけてくる。それにわたしは頷いた。

「うん、そう」

うん。こうしてると、カレヴィ、確かに王様らしく見えるね。なんというか、王様！ というオーラみたいなものがある。

そこで初めておとんとおかんは我に返つたらしくて、見慣れない

豪華絢爛な謁見の間と、若いけれど威厳のある人物を目の当たりにして、落ち着かなさげに視線をさまよわせていました。

「そうか。……俺はザクトアリア王国の国王カレヴィだ。この度はるかを花嫁に迎えることになった。今後、よろしく頼む」

「ま、まの」

威風堂々としたカレヴィに對し、おとんは氣の抜けた返事をした。
……まあ、今まで一緒に暮らしていった娘が、突然異世界の王様の
花嫁になるなんて訳の分からぬい状況になつたわけだし、この反応
は無理もないだろう。

一応反応したおとんはまだいい方で、おかん
コノヅイの罪は懲り罰つていいから、二ナ、二つ、一

「ハルカ、隣に座れ

おとん達と一緒にいたわたしは、カレヴィに隣の席を示されてちょっと驚いてしまった。

てないぞ。
だつて、あれつて王妃の席じやない?
わたしはまだ王妃になつ

え、いいの？

構わない。おまえは一用後には俺の妃になる、遠慮するな」「わ、それで、そこそこ遠慮なよ。

シナリオ作家の言葉

机が机に立つての詠葉に行き、昇高した。が、さうして、

そしておとんとおかんの方に向くと、一人は信じられないものを

見ていた。

それを千花がちよつと離れたところで様子を窺つてゐる。

異世界に来てしまえばモノがものたり
できただも同じだから、千花こは感謝だな。

「今言つた通り、一月後にはハルカは俺の花嫁になる。そなたらも
そのつもりでいてくれ」

「……まあ」

おとんとおかんは未だに信じられない様子で、間の抜けた返事をする。

「……やつこいつですか、今現在はるかが勤めている会社は辞めてもうらづことになります。その代わりと言つてはなんですが、わたしが新たに会社を設立して、はるかをその事務員としていたしましたから、経済的な心配はいらないと思います」

「千花ちゃんが会社を……」

千花の説明にぽかんとするおとんとおかん。結婚しているとしても、まだ二十代の千花が会社設立つていうのは驚愕に値するのだろう。

でもこれは、わたしが異世界で王妃になるよりも現実的だと思うぞ。

「ティカ殿。そのことなんだが、ハルカにかかる費用はザクトアリアから出すことにしたいのだが」

「そうですね。はるかは王妃になるのですし、その方がいいかもしれませんね」

カレヴィの提案に千花は頷いて了承した。

そうか、わたしの給料はこの国から出るのか。まあ、それが一番妥当だろつな。

千花にも変な負担はかけたくないし。

でもそうなると、わたしも趣味だけにかまけてられないな。王妃の仕事も頑張らないと。……今のところ、どんなことをやらなければいけないのか全然分かつてないけれど。

まあ、それは後でカレヴィとか侍女長のゼシリアに聞けばいいか。「……ハルカの父母はなにか言いたいことはないか？ あれば答えるが」

カレヴィのその言葉に、おとんははつとして言つた。

「お、恐れながら、どうしてはるかが王妃に選ばれたのでしょうか？ この娘は容姿は普通ですし、性格も決して気の回る方ではない。友人には恵まれていますが、そう社交的でもない。それなのに、な

ゼですか」

すると、今まで呆然としていたおかんもそれに便乗するように言った。

「そ、そうです。王様ならもつと若くて綺麗な方を選び放題でしょう。それなのに、なぜよりによつてこんな娘なんですか？　わたし共にはとても理解できません」

……一人とも、ここぞとばかりに言いたい放題だな。一人が普段わたしのことをどう思つてるかよく分かつたよ。

わたしが思わずむつとしてると、カレヴィイが椅子の肘掛けに置いてあつたわたしの手にその手を重ねてきた。

「王である俺が、ハルカを選んだのだ。それに文句があるのか」

カレヴィイが威圧的にそう言つと、おとんとおかんはかなりびびつたようだつた。そして、それ以上言つ氣もなくなつたようで、口を噤んでしまつた。

「……もつこのことに対する意見はないな。それでは、これで謁見は終了とする。ハルカの父母は別の間で休むよつて。……ハルカ、来い」

わたしは席を立つたカレヴィイに手を取られて立ち上がると、彼にぐいぐいと引っ張られた。

彼の表情をそつと窺うと、顔が険しい。

……なんか、カレヴィイ結構怒つてるみたいなんだけど。

ひょつとして、おとんとおかんの話を聞いて、変な女を掘まされたとでも思つてゐるのかなあ……？

それだと、王妃業の傍らに趣味三昧の生活が泡になつて消えそうな気もしたけど、でもわたしが千花とザクトアリアの繫ぎということがあるから、カレヴィイも王の立場からしたら簡単には婚約は取り消せないはずだ、……けど。

……うーん、困つたなあ。

一ヶ月後の婚礼については早すぎると思ってたけど、でもここでカレヴィイにやっぱり気が変わったとか言われたら、それはそれで困

る。

それじゃ、おとんとおかんに後でなんと言われるか分からぬ。

わたしは困惑しながらも、市場に売られていく子牛の「」と、複雑な気分でカレヴィに手を引かれて行った。

011 憤るカレヴィイ、舞い上がる両親

わたしは機嫌の悪そうなカレヴィイに、そのまま謁見の間の控え室みたいなところまで強引に連れてていかれた。

そしてカレヴィイはわたしと向き合つ。

「こんなことは言いたくはないが、なんだ、あの両親は」

「……あれ、別にわたしに怒つているわけではないんだ。

わたしは思わず気が抜けて、カレヴィイの端正な顔を見返した。

「……俺は、このことに対してもおまえの父母からの怒りを受ける覚悟もしていたんだぞ」

「え……、なんでおとん、じゃなかつた、父と母が怒るの？」

カレヴィイの思つてもいなかつた言葉に、わたしは思わずぽかんとしてしまつた。

「普通は、異世界などという訳の分からぬことに大事な娘をやりたくはないだらうが」

あー、普通はそうなのか。

まあ千花が言うには、うちの両親はちょっと特殊らしいし。

「……でもたぶん、二人ともまだ状況がはつきり把握できていないだけなんぢやないかな。だから失言みたいなことしちやつたんだと思うし」

おとんとおかん、謁見の間中呆然としてる「」ことがほとんどだったものね。

それがいきなり威厳のあるカレヴィイに意見を求められたら、それはつらたえるだらう。

でもまあ、あれは娘の結婚相手に対する失言だらうけど、まじ「」となきあの一人のわたしに対する本音なんぢやうな。

……そう考えると、なんだかちょっと落ち込んできた。

おとんとおかんがあの調子なのはいつものことなんだから、いい加減わたしも慣れというか、諦めればいいのに。

でもそれでもやつぱり、10の歳になつても親には認められたいんだろうか。

「それがなんだ。娘のことをあげつらつような真似をして。親なら娘の長所くらい分かつていそうなものだ」「うー

「あー、カレヴィイわたしのために憤つてくれてるんだね？」

「彼に惚れるまではいかないけど、これにはちょっと感動した。

カレヴィイ、なんだかんだ言つていい人だな。

千花しかり、親よりも血の繋がりのない人の方が信頼できるつてなんだかちょっと淋しくもあるけれど。

「……未来の王妃をあそこまで言われて黙つているほど、俺は薄情ではないつもりだぞ」

「うん、ありがと。……でもわたしの長所つて自分でも思いつかないな。だからうちの両親がそういう物言いになつたのも仕方ないと思うよ」

わたしがそう言つと、カレヴィイは顎に手を当てて少し考え込んだ。「ハルカの長所は、おおらかなところじゃないか？　たまに卑屈な発言も混じるが」

「……卑屈？」

カレヴィイの言つていることがよく分からなくて、わたしは首を傾げた。

「自分はもてない女だと豪語していただじやないか」

「ああ、あれね。

「いや、実際もてなかつたし。だから、そう言つただけなんだけど」胸が大きいけれど、もてた覚えは全然ない。

「それはやめる。おまえの容姿はおまえが言つほど酷くない。それに、おまえは俺の妃になるのだから、そんなことはもう関係ないだろ？」「うー

「うん、まあ。そうだね」

わたしはカレヴィイのその言葉にこくりと頷いた。

王様でイケメンなのに、気さくでこうこう気遣いができる彼は、結婚相手としては、これ以上は望むべくもないのだろう。

……ただし、突然現れたわたしをほとんどやけくそで王妃に据えようとしたことからも、結婚に対するやる気がほとんど皆無だということが分かる。

後でわたしが千花と友達だつて知つて、この結婚が国益になるつて理解した途端、やたら乗り気になつたけどさ。

たぶん、カレヴィイはわたしと同じく愛や恋というものをあまり重視していないのかもしれない。

そんなことを漠然と考えていたら、カレヴィイはわたしが頷いたことで、ほっとしたようだった。

「……それでは、ハルカの両親と合流するか。ハルカはまた着替えてこい」

「え、このままでいいよ」

いちいち着替えるの、めんどくさいし。

この世界の格好じゃないけど、一応それなりの服装をしているんだからこれでいいじゃない。

わたしは断つたけれど、カレヴィイがそれを許さなかつた。そして、有無を言わさない口調で言つた。

「ハルカ、着替える」

カレヴィイの命令で大急ぎで自分に「えられた王妃の間に戻つたわたしは、侍女達に例のキラキラした衣装に着替えさせられた。

あ、そうだ。

そういえば、明日会社辞めるつて言つに当たつて、用意するものがあるんだつた。

わたしがそれまでうつかり忘れていたのは、会社の人に配るお菓

子。

急だつたから無理かなあと思つたけれど、ゼシリアに一応言つてみたら、『自宅に帰宅される前には』用意しますと言つてくれた。

わあ、ゼシリア、有能すぎる。

「ありがとう。助かる」

わたしが感謝の言葉を彼女に伝えると少し困惑したよつてゼシリアは言った。

「わたくしは当然のこととしたままでですから、そんなもつたいたいないお言葉など、わたくしじきにおかけにならないでください」

「いや、でも嬉しかつたし。本当に助かつたし、ゼシリアありがとうね」

わたしがにつこり笑つて言つと、「ありがたいお言葉、ありがとうござります」と少し困つたよつてゼシリアが微笑んだ。

……うーん、王妃となる身分の者はやたら侍女に礼を言つものじやないのかな?

でも、いつこりうのは身分どうりに閑わらすこくらつてもいいんじやないかとわたしは思つんだ。

それで、支度を終えたわたしは、ゼシリアに案内されておとんとおかんのこる部屋に通された。すると既にそこには千花の他にカレヴィも来ていた。

中央の大きなテーブルには、おいしそうな料理と中身はお酒と思われるデカンターなんかが置いてあって、それを皿にしたらなんだかお腹がすいてきた。

わたしの姿を認めたおとんとおかんは真つ赤な顔でふらふらとわたしに近寄つてきた。

「おお〜つ！ はるか、そつこつ格好をするとまるで別人だぞ！ さすが未来の王妃だ！」

なにがさすがなんだかよく分からぬけど、おとんとおかんは既に出来上がつていた。

……なんで、よりによつてこんな場所でこんなに飲んだんだ。立派なよつぱらいじやないか！

「はるか、よくやつたわ！ またかあんたがこんな玉の輿に乗るなんて、まるで夢みたいだわ！」

そう言いながら、おかんは酒と思われるグラスをある。その様子をカレヴィは呆れたように見ていた。

まあ、彼の気持ちは分かる。

さつきまで、おとんとおかん、カレヴィに湯を入れられてたのに、それが一転してこの有様なんだもん。

「はるか、じめん。ちょっとお酒でも入れて、気分をほぐしてもらってから説明しようとしたらい、おじさんとおばさん、飲み過ぎちゃつて、こんなことに」

千花が申し訳なさそうに謝つてくるけど、どう考へてもこんなに正体を失うほど飲んだ本人達に問題があるだろ。ちょっとは自制しろ。

「侍女になにを用意したのか聞いたら、ルルア酒だったそうだ。これは飲みやすいが、かなり強い酒だ」

カレヴィは、強いと言つわりにはそのルルア酒なるものをくいくい飲んでいる。カレヴィはお酒には相当強いみたいだ。

わたしはカレヴィに促されて、彼の隣に座つた。

カレヴィにルルア酒を注いでもらうと、一口それを呑んだ。……なるほど、フルーティで確かに飲みやすい。

そんなに強いお酒なら、ちょっと油断するとすぐに酔つぱらう。うだ。

そう思いながら、わたしはおいしい料理を肴にルルア酒をちびちびやついていたら、またしてもおとんとおかんが寄ってきた。

「正直、おまえにはまったく期待していなかつたがー、世の中には不思議なこともあるもんだなあ～」

……うつせい、おとん。

さりげなく傷を抉るようなこと言つた。

「それもこーんなハンサムな王様とおー。わたしがもつりょつと若かつたら代わりたかつたわ～」

「……もつりょつとつて、それでも歳取りすぎだらう、おかん。

「……しかし、ハルカの両親は変わっているな

カレヴィは溜息をついてしみじみと言つ。

……わたしがここに来るまでにおとんとおかん、いつたいなにをやつたんだ。

千花に聞くと、一人は狂喜乱舞の踊りを今まで披露していたらしい。

うわあ、変な酔っぱらいだ……。傍田にはなぜ奇妙な光景に映つただろう。

しかし、おとんとおかんに踊り癖があるなんて初めて知ったよ。なんだかさつき一人にムカついていたのが馬鹿馬鹿しくなり、わたしは手元のルルア酒のグラスをうつかりあおつてしまつた。

そしてその後。

見事に出来上がつてしまつたわたしは、カレヴィを床に正座させて「政略結婚も結構だけど、そればかりつていうのはどうなの？それに、もしわたしがとんでもない不細工だつたらどうしてたの？」と懇々と説教していたとか。

それを後で千花から聞かされたけど、わたしはまったく覚えていなかつた。

012 突然ですが結婚します

とりあえず、おとんとおかんにはわたしがカレヴィの妃になることは理解してもらつた。

だけど問題はまだ残つている。というか、これが最大の難関だ。ザクトアリア王妃になるには、その準備期間もあるから、わたしはすぐに会社を辞めなければならない。

ただ、これが社会人として周りに非常に迷惑をかける行為なのは分かっている。それは本当に申し訳ないとと思う。

わたしの直属の上司である主任も今すぐ辞めることに済るのは容易に想像できる。

この世界に来たのが金曜日の夕方で、そして今日は土曜日。明日は会社の出勤日だ。

上司の反応やら、突然仕事を放り出すことになつたことについて考えるととても気が重かつたが、とにかくわたしは休み明け早々主任に話をするとした。

そして、月曜日の朝。

わたしはいつも通り車で出勤した。

ゼシリアには昨晩のうちにみんなに配るお菓子を丁寧かつ上品なラッピングで個別包装してもらつてある。

これなら、みんなに配るのに申し分ない。

ゼシリアと、たぶん厨房の人達いい仕事をするなあ。

ちなみにカレヴィと千花はもう少ししたらわたしの魔力をたどつて、会社に移動してくる手筈になつていて。

わたしはいつもより早めに会社に出勤して、主任に話を切り出すための準備をしていた。

今日のわたしは、あか抜けない水色の事務服と白いスカートといつこの会社ではまあ標準の格好だ。

「悪いけど、しばらくここで待機しててね」

こちらの世界に移動してきたカレヴィや千花といる備品倉庫は滅多に人が来ない穴場だ。

もし万が一人が来ても、千花がいるから隠れることはできるし、まあ大丈夫だろう。

「……俺も一緒に行かなくていいのか？」

千花に異世界移動されてきて、この世界の服装をしているカレヴィが少々心配そうに言つてきた。

うん、イケメンはなにを着ても似合つなどこんな時だけわたしは妙に感心してしまつた。

カレヴィは初めてきた世界だといつに、そのことに動搖する気配もない。うむ、肝の据わつたやつだ。さすが王様。

……とは言つても、まだ車とか電車とか、立ち並ぶビルとか見た訳じゃないから、そこ辺はまだピンときていなければかも知れないけど。

「うん、まだ大丈夫。必要になつたら呼びにくるから。……ちょっと殺風景なところだけど、我慢してね」

わたしは力強く頷くと、カレヴィと千花も「分かった」と言つて頷いた。

「はるか、頑張つて。駄目そなうならすぐそつちに向かうから」

わたしは千花の応援を受けて、心強く思つた。千花がいるなら百人力だ。

「うん、じゃあ後でね」

わたしは一人の存在をありがたく思いながらも、千花とカレヴィに手を振り、職場の事務所に向かつた。

始業四十分前の事務所にはまだ誰も来ていなかつた。

この会社はみんなぎりぎりにしか来ないらしく出勤が遅い。他の会社に勤めている友達に聞いてみたら、驚かれたけれど。

わたしは謝罪と今までの感謝の意味も込めて、みんなの机の上をいつもより綺麗に水拭きしてから、床を簾で掃いた。
ちりとりでゴミを集めていたといひで、よひもく主任がやつてきた。

「おはよう。なんだ、只野ちやん、今田はやけに早いな」
まあ、いつもは二十分前とかだもんね。主任がそのままのまま当たる前だ。

「ええ、まあ。主任、おはようございます」
わたしは適当にはぐらかしつつ彼に挨拶すると、とつあえずちりとりのゴミを捨てに行つた。

それから給湯室で手を洗つて、お茶の準備をする。
お湯で急須と主任の湯呑みを暖めてからそのお湯を捨て、お茶を淹れる。

わたしは主任の湯呑みをお盆に乗せて運びながら、結婚話をなんと言つて切り出すつかと考える。……あ、もつ着こちやつた。

「どうぞ」「ありがとう」

わたしが机にお茶を置くと、主任はまず一口啜つてから呑つた。
「うーん、やっぱ只野ちゃんの淹れたお茶が一番いいなー。なん

といふか、春山ちやんは淹れ方が適当だからなー」

ちなみに、主任が言つた春山ちやんといふのはわたしの後輩に当たる事務の女の子だ。

まあ、わたしの淹れ方もじへ普通なので、そんなに褒められるとものではない。

わたしはお盆を胸の前で抱え込むと、カレヴィーとの結婚話を思い切つて言つてみることとした。

「とにかく、主任。お話があるんですが

「ん?
なんだ、困つたことでもあつたの?」

「いえ、そりゃうるさいではないんですが……」

突然わたしが抜けたとしたら、会社としても仕事のやりくりに頭を悩ませるだろう。

「……実はわたし、今度結婚することになつたんですね」

そう言つた瞬間、お茶を飲んでいた主任が思いきり吹き出した。

い心の母でつゝいんでしまひ。

といえども、わたしは急いで

「あ、ああ、ありがとうございます。」ナビ、只野ちゃんは誰かって本音

なのかな？」

本当です あと急で申し訳なしのですか すぐには詰めさせてもいい

כט ע' אגדה

う、心が叶うかなね。

「すぐ」で「ヶ月後くらい」?

卷之三

きつた顔になつた。

きにた顔になつた

「それは困るよ、山継もあるんだから、そりや、そりだつたな。

わたしでもこんな状況にいきなりなつたら困るだろ?」

「……一応、春山さんはわたしの仕事を教えてはありますか？」

てもらわないと」

「すみません。でも、外国の人に嫁ぐことになつたので、それは無理なんです。本当にすみません」

わたしはここぞばかりに主任に誠心誠意頭を下げて謝った。……
こんなことしても会社に迷惑をかけるのは変りないんだけど、やっぱり気持ち的にすぐ申し訳なかつたし。

「只野ちゃんが外国人と……」

主任はモテない女のわたしが急に結婚すると言つてきて、そしてその相手が外国人だということにショックを受けたようだつた。
その時だつた。

「おい、ハルカ。まだ説得できていないのか」

呼んでもいなのに、なぜかカレヴィイがそこに現れてわたしは驚いた。

さらに間の悪いことに事務所の他の人達や作業員のおばちゃん達が出勤してきて、どう見ても外国人で、飛び抜けた美形のカレヴィイを目にして大騒ぎになつた。

彼がわたしの関係者だと知られて、わたしはもみくちゃにされながら、噂好きのおばちゃん達に質問責めにあつ。

「……え、えーと、彼がわたしの結婚相手です」「仕方なくわたしは、カレヴィイを手で示しながら紹介する。

その後の騒ぎは、もちろん先程の比ではなかつた。

ちょっとした大混乱の後、わたしとカレヴィイは主任から報告を受けた係長、課長と一緒に応接室にいた。

「ほう、それではカレヴィイさんはフランスの方なんですね」「どうやっているのかは分からぬけれど、わたしとカレヴィイの耳元には千花の指示が隨時届いている。

わたし達はそれに従つて、目の前の課長と係長に結婚に至る嘘の説明をしていた。

彼らを騙していることは心が痛むけど、本当のことを言つわけにはいかないので仕方がない。ここは割り切つて話を進めなきや。最初にカレヴィイをフランス人という設定にすると言つた千花に、浅黒い肌のカレヴィイははたしてそう見えるのか不安を覚えたわたしだつたけれど、まったく問題なかつたようだ。

フランス人といったら今まで白人のイメージしかなかつたけれど、実際は色々な人種の混血が進んでいて、見た目も様々なんだそうだ。課長と係長もそれは初耳だつたようで、カレヴィイのどこの国とも知れない容貌を興味深げに見ていた。

「俺の家はそこそこ格式のある世家だ。そこで、ハルカには花嫁修業がてら、言葉を磨得してもらう。その為には今すぐ日本を発たなければならぬ」

課長と係長相手にどこまでも偉そうにカレヴィイは言つ。

まあ、一国の王様だから仕方ないのかもしれぬけれど、もうちよつとなんとかならないものか。

カレヴィイの第一声を聞いた時から、わたしは思わず頭を抱えたくなつてしまつたけど、生まれながらにして王になることが決まつていた彼には臨機応変という文字はないらしい。

ちなみに、課長と係長には最初にカレヴィイは教わった日本語が偏つてるので、偉そうに聞こえるのは勘弁してくださいと断つてあ

る。

でも、課長と係長もカレヴィの威風堂々とした態から、その口調もあまり気になつていないようで、むしろとても偉い人を迎えるような態度になつてゐる。

「そうですか。只野さんは仕事もできるし、本当は抜けられると困りますが、そういう事情ならいたしかたありませんね」

「おお。課長、今のはお世辞でも嬉しいよ。」

カレヴィの言葉に領きながら言つた課長の言葉にわたしはちょっと感動する。

「確かに、今度から只野さんに急ぎの文書を上げても、いつもこれができなくなるのはちょっと厳しいな。只野さんのタイピングのスピードは貴重だったからね」

確かにキーボードと電卓の打ち込み速度だけはこの会社の誰にも負けない自信はある。

でも、こうやって認められてると思つと嬉しいな。

「すみません」

自分では駄目駄目な人間だと思つてたけど、会社の人達はこんなわたしを評価してくれてたんだ。

そう思つと本当に申し訳なくて、わたしは一人に深々と頭を下げた。

「まあ、こんな事情ならしあうがないから、只野さんは自分の幸せを優先して。慣れない海外生活、体に気をつけて頑張つてね」

「あ、ありがとうございます」

課長がわたしに激励の言葉をかけると、係長も続けて言つた。

「溜まつてゐる有給休暇はちゃんと消化するからね。仕事のことなら、みんなで分担してなんとかするから、後のこととは気にせず、自分の幸せのことを考えてね」

「本当にすみません。ありがとうございます」

「課長と係長、本当にいい人過ぎ」

暖かい一人の言葉にわたしはつい涙腺が緩んで、ちょっとだけ泣

いました。

「ハルカ」

カレヴィがわたしの肩に手を置いて、心配そうに覗きこむ。

課長と係長はそんなわたし達を微笑ましそうに見ながら、心から祝福してくれた。

そしてめでたく寿退社することになったわたしは、自分のロッカーの整理をしてから、机にある私物をまとめると、事務所の人達にゼシリ亞に用意してもらつたお菓子を配つて回つた。
ザクトアリアの王族用に出されるお菓子だから、その美味しさは保証済みだ。

「おめでとう、只野さん」

「まさか只野ちゃんが嫁に行くとはなあ。向こうでも頑張つてね」「只野さん、こんな素敵な彼氏がいるなら早く言つてよ。……前に嫌なこと言つちゃつてごめんね」

先週、取引先の接待にわたしをかりだそうとしていた相田さんがばつが悪そうに謝つてきた。

「本当にすみません。あの時のことは気にしてないですから、相田さんも気にしないでください」

相田さんもこうやって自分の非を認めてきちんと謝つてくれるんだから、別に嫌な人ではないんだよね。ただ、物言ひがちょっときついだけで。

「只野さん、いなくなつちゃうなんて寂しいですぅ～」

そう言つて抱きついてきたのは、後輩の奈緒ちゃん。さつき主任に春山ちゃんと呼ばれていた子だ。

ちよつと頼りないところもあるけれど、きっと彼女ならわたしの代わりにバリバリ働いてくれるだろと信じている。

「急なことで本当にごめんね。迷惑かけるけど、後のことは頼むね

「ハルカ」

カレヴィがわたしの肩に手を置いて、心配そうに覗きこむ。

課長と係長はそんなわたし達を微笑ましそうに見ながら、心から祝福してくれた。

そしてめでたく寿退社することになったわたしは、自分のロッカーの整理をしてから、机にある私物をまとめると、事務所の人達にゼシリ亞に用意してもらつたお菓子を配つて回つた。
ザクトアリアの王族用に出されるお菓子だから、その美味しさは保証済みだ。

「おめでとう、只野さん」

「まさか只野ちゃんが嫁に行くとはなあ。向こうでも頑張つてね」「只野さん、こんな素敵な彼氏がいるなら早く言つてよ。……前に嫌なこと言つちゃつてごめんね」

先週、取引先の接待にわたしをかりだそうとしていた相田さんがばつが悪そうに謝つてきた。

「本当にすみません。あの時のことは気にしてないですから、相田さんも気にしないでください」

相田さんもこうやって自分の非を認めてきちんと謝つてくれるんだから、別に嫌な人ではないんだよね。ただ、物言ひがちょっときついだけで。

「只野さん、いなくなつちゃうなんて寂しいですぅ～」

そう言つて抱きついてきたのは、後輩の奈緒ちゃん。さつき主任に春山ちゃんと呼ばれていた子だ。

ちよつと頼りないところもあるけれど、きっと彼女ならわたしの代わりにバリバリ働いてくれるだろと信じている。

「急なことで本当にごめんね。迷惑かけるけど、後のことは頼むね

そしてめでたく寿退社することになったわたしは、自分のロッカーの整理をしてから、机にある私物をまとめると、事務所の人達にゼシリ亞に用意してもらつたお菓子を配つて回つた。
ザクトアリアの王族用に出されるお菓子だから、その美味しさは保証済みだ。

「おめでとう、只野さん」

「まさか只野ちゃんが嫁に行くとはなあ。向こうでも頑張つてね」「只野さん、こんな素敵な彼氏がいるなら早く言つてよ。……前に嫌なこと言つちゃつてごめんね」

先週、取引先の接待にわたしをかりだそうとしていた相田さんがばつが悪そうに謝つてきた。

「本当にすみません。あの時のことは気にしてないですから、相田さんも気にしないでください」

相田さんもこうやって自分の非を認めてきちんと謝つてくれるんだから、別に嫌な人ではないんだよね。ただ、物言ひがちょっときついだけで。

「只野さん、いなくなつちゃうなんて寂しいですぅ～」

そう言つて抱きついてきたのは、後輩の奈緒ちゃん。さつき主任に春山ちゃんと呼ばれていた子だ。

ちよつと頼りないところもあるけれど、きっと彼女ならわたしの代わりにバリバリ働いてくれるだろと信じている。

「急なことで本当にごめんね。迷惑かけるけど、後のことは頼むね

そしてめでたく寿退社することになったわたしは、自分のロッカーの整理をしてから、机にある私物をまとめると、事務所の人達にゼシリ亞に用意してもらつたお菓子を配つて回つた。
ザクトアリアの王族用に出されるお菓子だから、その美味しさは保証済みだ。

「おめでとう、只野さん」

「まさか只野ちゃんが嫁に行くとはなあ。向こうでも頑張つてね」「只野さん、こんな素敵な彼氏がいるなら早く言つてよ。……前に嫌なこと言つちゃつてごめんね」

先週、取引先の接待にわたしをかりだそうとしていた相田さんがばつが悪そうに謝つてきた。

「本当にすみません。あの時のことは気にしてないですから、相田さんも気にしないでください」

相田さんもこうやって自分の非を認めてきちんと謝つてくれるんだから、別に嫌な人ではないんだよね。ただ、物言ひがちょっときついだけで。

「只野さん、いなくなつちゃうなんて寂しいですぅ～」

そう言つて抱きついてきたのは、後輩の奈緒ちゃん。さつき主任に春山ちゃんと呼ばれていた子だ。

ちよつと頼りないところもあるけれど、きっと彼女ならわたしの代わりにバリバリ働いてくれるだろと信じている。

「急なことで本当にごめんね。迷惑かけるけど、後のことは頼むね

わたしがそつぱつと、奈緒ちゃんは真っ赤な皿をして、はい、と頷いた。

「せつかくのおめでたいことなのに、只野ちゃんにお祝いをあげられないで」めんね

主任が申し訳なさそうに言つてきただけれど、いきなりこんな無茶を聞いてくれただけでも充分ありがたい。

「いえ、そんなこと気にしないでください。急に無理を言つてすみませんでした。それから……、今まで本当にお世話になりました」

わたしは事務所の人達に深々と頭を下げてから、失礼しますと言つて、後ろ髪を引かれつゝも踵をかえす。

わたしはカレヴィに肩を抱かれて、その背に「只野さん、お疲れさま」「体に気をつけてね」「お幸せに」等々、ありがたい言葉を受けながらその場を去つた。

わたしが備品倉庫まで戻つてくると、その場に待機していた千花は笑顔で迎えてくれた。

「あつ、はるか！ よかつたね、うまく説得できて」

「うん」

千花のその笑顔を見たら、なんだか急に泣きたくなつて、わたしは彼女に抱きついてしまつた。

やつぱり、みんなとそれなりに仲良くなつて、一生懸命働いてた会社を辞めるのはすこく淋しいよ。

ぽろぽろ涙をこぼすと、千花は慰めるようにわたしの背を優しく撫でてくれた。

「……いつこいつ場合は、普通、夫になる俺に抱きつくものじゃないか？」

とかなんとか、カレヴィがぼやいたらしけれど、その時のわたしもちらん聞いている余裕なんてなかつた。

たとえあっても、たぶんカレヴィに抱きつくるのではないと思つた
どね。

めでたく寿退社したわたしは、またザクトアリアに戻つてきてい
た。

その前に家に戻つて、サイトには私事が忙しいので更新が滞ると
告知してあるので、これでしばらくは安心だろう。

これからわたしには、怒濤の花嫁修業が待つてゐるんだよね。…

…それを考えると、ちょっと気が重い。

千花もいろいろ忙しいらしくて帰つちゃつたし、これからのこと
を考えるとかなり不安だ。

わたしは王と王妃の共同の間でカレヴィと晩餐をとつた後、香り
高いコーヒーを飲みつつ、少し溜息をつく。

それを耳聴く聞きつけたカレヴィが言つてきた。

「なんだ、ハルカ。不安なのか？」

「……まあ、不安といえば不安だけど。わたしは庶民だし、ちょ
うと気が重いよ」

はたして一ヶ月の間に王妃らしい気品を身につけることができる
のか、それさえ不安だ。

「そうか、それもそうだな。だが、おまえは無理をせず、徐々に慣
れていけばいい。……そういえばおまえには決まった侍女を付けて
いなかつたな。代々王妃には三名付くことになつてゐるが」

「え、そんなにいらないよ」

わたしに三人も付くとかそんな大げさな。

一人でも大抵のことはできるのに。

「そつはいかない。王妃となればそれなりに体裁を整えなければな
らない」

「そうなの？」

王妃の体裁とか、なんか面倒だなあ。

侍女も交代要員を含めて一名もいれば充分だと思つただけど。

「侍女長と相談して、若くともしつかりした者を選ぶよしひじょ。そうすればハルカのいい相談相手になるだろ？」

「う、ん。ありがと」

ちょっと重いけど、カレヴィイはわたしのためを思つてやつてくれてるんだから、そこは感謝しなきゃいけないよね。

カレヴィイが侍女長のゼシリアを呼ぶと、彼女は既にわたし付きの侍女を決めてあつたらしく、すぐに紹介されることになった。新しくわたしに付く侍女は、赤毛で水色の瞳、褐色の肌のイヴェンヌ、日本人のそれよりもずっと濃い黒髪黒目、象牙の肌のモニー、白っぽい金髪、緑青色の瞳、白い肌のソフィアと見た目も様々だった。

この国は他の国よりもいろいろな見た目の人が多いらしいから侍女もそんな感じの人達になつたらしいけれど、これだつたら名前も間違うこともなさうなのでよかつたのかもしない。

それに、この国の人は陽気な人が多いから三人とのおしゃべりが楽しそうだ。

侍女達を紹介された後、わたしは自分の居室に戻つて、下描きまでしていた漫畫のペン入れでもしようかと思つていたけれど、なぜかそれをゼシリア達に止められて、湯殿まで連れていかれた。

まだ寝るまでに時間はあるし、今はいいよと断つたんだけど、「だからこそです」という謎の言葉を受けて、わたしは首を捻る。

そんなこんなでわたしはゼシリア達に気持ちいつもよりも丁寧に洗い上げられ、香油を使ったマッサージも丹念にされて綿の寝間着を着せられた。

「それではおやすみなさいませ」

「ハルカ様、頑張つてくださいませ」

……頑張るつてなにを？

年若い侍女達から赤い顔で言われた言葉に対し、わたしは天蓋付きのベッドに腰掛けながら首を傾げる。

そうしているうちに、侍女達は明朝伺いますと言つて寝室を出ていつてしまつた。

なんだかよく分からぬながらも、寝るにはまだ早いし、家から持つてきた漫画でも寝ころんで読むかと、居室に置いてあるそれを取りに行こうとして立ち上がつた。

その時、いきなり寝室のドアを開けてカレヴィイが現れたのでわたしはびっくりしてしまつた。

「ハルカ」

いるはずのないカレヴィイの出現に、わたしはすっかりうるたえてしまつた。

「カ、カレヴィイ？ ビうしてここに？」

まさかとは思うけど、アレをしにきたんじゃないよね？

カレヴィイとはまだ結婚している訳ではないし、ただ婚約中というだけなんだから、ぜひそうであつてほしい。

「おまえを抱きにきた」

「はい、つ！？」

嫌な予感が的中してしまつたわたしは思わず飛び上がつてしまつた。

「な、なに言つて……、だつてまだカレヴィイとは婚約期間中でしょ！？」

カレヴィイからなるたけ離れようと後ずさつたわたしは、自分からベッドにダイブしてしまつた。

思わず悲鳴を上げたわたしをカレヴィイは呆気にとられたように見ていたけれど、わたしが体を起こす前に手首を押さえつけられてそれを阻まれた。

「だ、駄目だつて！ だつて、花嫁は清らかじゃないといけないって言つてたじやない！」

必死に足をじたばたさせながら訴えたが、カレヴィイはまったく気がしたふうでもなかつた。

「夫になる俺なら別だ。……それにこれは夜の習いといふ花嫁修業の一環である」

そんなの、聞いてないよ……

そう叫ぼうとした途端、カレヴィイの唇に口を塞がれた。

「ちょ……、カレ、……ヴィ……ッ」

文句の一つも言つてやろうと口を開くも、その度にカレヴィイの深い口づけを受けてわたしは息も絶え絶えになる。

こんなことがあるんだつたら、なぜ事前に言つてくれなかつたの？

それだつたら、心の準備もできたのに。

「こんな、急に……、酷いよ……っ」

なんとかそれだけ言つたけど、彼から返つてきたのは容赦のない言葉だつた。

「おまえは俺の妃になると決めたのだろう。だつたら我慢し」
……そう言われると、わたしはなにも言えなくなつてしまつ。
最終的にザクトアリア王妃になることを決めたのは他でもないわたし自身なんだし。

「……分かつたよ」

わたしが諦めて体の力を抜くと、カレヴィイは無駄に色氣を振りまいてふつと笑つた。

けれど、その笑みは経験ゼロのわたしには恐怖でさえあつた。
思わず息を飲んでしまつたわたしをカレヴィイは見下すと、いらん宣言をしてくれた。

「いろいろと仕込んでやるから覚悟しておけ、ハルカ」

お願いだから、程々にお願いします。

なんと言つてもわたしは初めてだし、その点はさすがにカレヴィイも考慮はしてくれるだろう。

……などと思ったのは実はどんでもなかつたと、後にわたしは身を持つて知ることになつてしまつた。

「……そう怒るな、ハルカ」
少しばかり遅い朝食の席で、カレヴィイはわたしにちょっと後ろめたそうに言つてきた。

昨夜は結局合意の上でそういう行為に至つたわけだけど、なぜ起き抜けにまでアレを無理矢理されて、わたしは機嫌が悪かつた。……まあ、それ以外にも理由はあるけど。

「おまえが思いの外よかつたので、つい我を忘れた。すまない」
「うるさい、このHロ王。……いや、野獸。

わたしを結婚相手に選ぶくらいだから、アレの方も淡泊なのかと思つたら、実はとんでもなかつた。

カレヴィイは、恥ずかしがるわたしにさんざんHロイことや言葉責めをし、そしてあらうことか、わたしにまでそのHロイことをするようにならしてきていたのだ。

「……言つておくけど、わたしは初めてだつたんだからね？」

初めてでさすがにあれはないだろう。

恥ずかしいから詳細は言わないけど、そういうのを商売にしているような人がするようなことをわたしはカレヴィイにされたのだ。カレヴィイはさすがに最初はなるべく痛くしないように配慮してくれてたみたいだけど、でもやっぱり初めてだから痛かつたし。……まあ、でもそれは仕方ない。けど問題はそれからだ。

カレヴィイは途中でたがを外してしまつたようで、わたしは何回もやられてしまつた。そしてわたしは、今腰が痛くてたまらない。

今朝も侍女一人に両脇を抱えられてやつとこの席に着いたぐらいだ。

……これが初めての人間にやることか？ やりすぎにも程がある。「それは悪かつたと思っている。しばらくはあの手の無理強いはし

ない」

わたしの怒りの言葉に、カレヴィイはぱつが悪そうな顔で謝つてきた。

「……なら、いいけど。それにしてもいやに手慣れてたけど、過去にそういう人でもいたの？」

わたしがそう聞くと、カレヴィイはちょっとうろたえてた。

……カレヴィイは美形だし、王様だし、そういう人がいてもわたしは一向に気にしないけどね。むしろいなの方が不自然だろう。

「いや、王宮付きの高級娼館からの娼婦としかそういうことはしていない」

「……へー……」

意外と言えば意外。

まあ、その方があとくそれもないのかもしれないけど。

そうか、だからわたしに対しても高級娼婦相手にするような行動に走つたんだ。

「あれ、普通の姫だつたら、びっくりしそぎて泣いてたんじゃない？ いくらなんでも初めてであんなこと強要するとかないでしょ？」

わたしの代わりに別の姫がカレヴィイの結婚相手となつた場合を想定して言ってみる。

うん、結婚に夢を持つてる姫ならあまりの扱いにショックを受けれるかもね。

わたしは、夢も希望も持つてない歳いつた女だからまだましだけど、それでも初めてであれば酷いと思う。

「……だから、すまないと……、そうだ、ハルカなにか欲しいものはないか」

それまで居心地悪そうな顔をしていたカレヴィイが突然思いついたように言つてきた。

どうやら物で釣る作戦らしい。

ふーん、カレヴィイがせつかくそう言つならねだつてみようか。ちようど、欲しかったものがあるんだ。

「それじゃ、腕カバーが欲しい」

わたしがそう言つと、なぜかカレヴィの目が点になつた。

「……腕、カバー……？」

「漫画描くのに衣装の袖が汚れそんなんだよね。腕まくりしてもいいけど、腕が汚れるのは変わりないし」

わたしの描いている漫画はカレヴィには既に見せてある。最初カレヴィは漫画特有のデフォルメした描き方に戸惑つていたけれど、すぐにそれに慣れて漫画の読み方について聞いてきた。基本的には一頁の右から左に読んでいくんだよと言つたらすぐ理解したらしくて、わたしの描きかけの原稿にすいすい目を通していた。

……こんなことなら今まで描いた原稿も持つてくるんだつたな。今度向こうに行つたときは全原稿を持ってこよう。

そういう訳でわたしの描いた漫画を読んだカレヴィだつたけれど、女らしくないわたしにしては、中身がかなり少女趣味だつたので結構驚いていたみたいだ。

人は見かけによらないものだな、とわたしの顔を見て彼はしみじみ呟いてた。……失礼な。

ちなみにわたしの描く漫画は、千花に魔法をかけてもらつてあるから、こちらの世界の人にも理解できるようになつてゐる。

……本当に千花の魔法は便利だなあ。

わたしがつくづく感心していると、カレヴィがちょっと困った顔をして聞いてきた。

「……そなものでいいのか？ 首飾りとか腕輪が欲しいとかないのか？」

「ううん、腕カバーがいい。それも木綿で黒くて汚れが目立たないやつ

わたしがきつぱりはつきりそう言つと、カレヴィイはビリとなく不満そうな顔で大きく溜息をついていた。

「なんだ、腕力バーじやいけなかつたのかな？ でも当面欲しいものもないし、もしあつても千花が持つてくれるし。わたしが首を傾げながらそう思つていて、カレヴィイがちょっと呆れたような顔で言つてきた。

「本当に、おまえの考えることは俺には分からん」
うーん、庶民と王様の考え方の違いは結構大きい、のかな……？
なんだか、それだけじやないような気もするけど。
それからカレヴィイは、イヴェンヌ達に腕力バーをすぐ持つてくる
ように言いつけると、ソフィアが代表してそれを持ってくれた。
これだよ、これ。

構造は簡単だから、たぶんあるんじやないかとは思つてたけど、
やつぱり異世界にもあつたよ、黒い腕力バー。
ちょっと感動しながら装着したら、カレヴィイに今着けるのはやめ
ろと言われてしまった。
これくらいいいじやん、けち。

仕方なく腕力バーを外してカレヴィイと食後のコーヒーを飲んでたら、千花が律儀にわたしの様子を見にやつてきた。

「千花、つ！」
昨夜のことを報告しようと千花に駆け寄つとしたら、途端に腰
に痛みが走つてわたしはよろけた。

「危な……」

「ハルカツ」

バランスを崩したわたしに、千花とカレヴィイが声を上げる。

その途端、見えないなにかがわたしの体を支えて、どうにかわたしは転ばずに済んだ。……もしかして、千花が魔法で受け止めてくれたのかな。

「はるか、どうしたの？」

瞬間に千花がよろよろしてわたしの傍に移動して尋ねた。

カレヴィも椅子から立ち上がり、わたしの傍に寄つてくる。

「あ……、うん。ちょっと、腰が痛くて」

「……腰？」

千花が首を傾げながらもわたしの肩に触ると、さつきまでわたしを苦しめていた腰の痛みが急になくなつた。

「あ、あれ……？」

「治癒魔法を使つたの。それにしてもはるか、腰が痛いってもしかして……」

千花が眉を寄せて言いづらそうにした。

「うん、まあこういうことは本人を前にして言いにくいよね。

「あ、うん。昨夜カレヴィとそういう事になつたんだ」

わたしがそう言つた途端、千花がきつとカレヴィを睨んだ。

「……どういうことです？ まだはるかとは婚約期間中でしょう」

千花のその厳しい視線にも特に堪えた様子もなく、カレヴィはこともなげに言つた。

「我が国では、王及び王太子に輿入れする花嫁は、婚礼一ヶ月前の婚約期間中に伽の習いをするしきたりがある。俺はそれに従つたまでだ」

「え……」

千花はザクトアリアのその風習を初めて知つたらしくて、愕然とした顔になつた。

「は、はるか、ごめん。わたし、この国にそんな風習があるなんて知らなくて。……大変だったでしょ？ 『ごめんね』

千花がうろたえながらわたしに縋りついて謝つてきたけれど、これは彼女が悪い訳じやない。まあ、あえて言つとしたら悪いのは。

「ううん、千花が謝る事じやないよ。結局王妃になるつて決めたのはわたし自身だし。だから気にしないで」

「でも……」

わたしは笑つて言つてみたけど、千花はまだ申し訳なさそうだ。

……仕方ない。千花は最強の魔術師で忙しいのは分かつてること、その時間を少しもらつてしまおつ。

「じゃあ、午前中までわたしに付き合つてよ。久しぶりに千花に漫画のアシしてもらつから。それで今回の件は帳消し。ね？」

わたしがひとつ笑つて千花の肩を叩きながらそう言ひと、彼女はちょっとだけ泣きそうになりながら、うん、と頷いた。

「……まあ、俺も事前に言つておかなくて悪かつたが」

それまでわたし達の会話に入りづらそうにしていたカレヴィイがわたしに謝つてきた。

そんなこと今更言われても遅いんだよー。
だからわたしは、ここぞとばかりに言つてやつた。

「本当だよねー！」

「……おまえ、ティ力殿と夫になる俺との扱いが違いますわー」

「そりや、千花は幼なじみの友達だもん。昨日今日会つたばかりのカレヴィイとは歴史が違うよ。……それよか、カレヴィイ執務に取りかからなくていいの？ わたしもいい加減漫画描きたいし、女同士の話もしたいから、もう自分の部屋に戻るね」

わたしはカレヴィイの抗議を軽くあしらつと、千花を促して、共同の間から自分の居室へとそつそと移動する。

「おい、ハルカ」

カレヴィイがなにか言いたそうにしたけど、無視。

腕力バーはもらつたけど、やつぱりまだカレヴィイにはアレのこといろいろと怒つてるんだよね。

「……ねえ、はるか。カレヴィイ王が呼んでるけど」

千花が気遣わしげに言つてくるけれど、いいのいいの、気にしないで。

「それよか、聞いてよ千花。カレヴィイつたら酷いんだよー。」
わたしは完全にカレヴィイをしかとして千花に話しかける。
わたしのあからさまな無視にちょっと呆然としているカレヴィイを
氣の毒そうに見ながらも、モニー力達三人もわたし達の後について
きた。

それから。

カレヴィイはすごすこと自分の執務室に戻つていつて、ちょっと拗
ねていたとか。

まあ、これはゼシリアから聞いた情報なんだけどね。
でも彼がわたしにしたことを思えばそれでも生ぬるいと思つ。
どっちにしろ拗ねたいのはこっちの方だよ！ とカレヴィイに声を
大にして言いたいわたしだつた。

わたしは昨夜のカレヴィの所業を千花と侍女達三人に話した。とは言つても、侍女三人は未婚者だし、さすがにありのままのことは話せなかつた。

ただ、カレヴィのしたことが初めての夜にしてはやりすぎたことと、そんなわたしの体のことを労つてくれなかつたことだけ話した。だけどそれでも、わたしが朝まともに起きあがれなくて、モニー・カとソフィアの介助を受けて朝食の席に着いたこともあり、本当の事情を知らない彼女達の同情を誘つたようだつた。

「陛下、あんまりですわ」

「ハルカ様は初めてだといつのに、酷すぎますわ」

「陛下は自分本位で物事を進めすぎですわ。こういうことは殿方の思いやりがあつて初めてうまくいくものだと思いますのに」
ふふふ、そうでしょ、そうでしょ。

カレヴィイつたら酷いよね。

でも、本當はもつと酷かつたんだよ。
あんなことやこんなことされたなんて言つたら、免疫のない彼女達のことだからきっと卒倒しちゃうかもね。

まあ、千花には後でこつそり本當のことを伝えるつもりだけど。

そして、昨夜のことを「まかしながらもカレヴィの文句を言いつつ、わたしは居室のテーブルに漫画の原稿を広げていた。

ちなみにわたしは腕カバー装備、アシスタントの千花は魔法で防御するから腕カバーはいらないと言つて綺麗なドレスの格好のままでいた。

まあ、千花の美貌に腕カバーはちょっとというか、かなり台無しだからそれは正解だつたと思う。

「それにも……、さつきのはるかのカレヴィ王への態度はまず

かつたんじやないかなあ」

千花がペンで枠線引きをしつつそつと書つてきたので、ちょっと納得できなかつたわたしは反論する。

「だつて、あれくらいしなこときつと反省しないよ。カレヴィイは王だからあまり強く言う人間もいないだろつ」

カレヴィイが昨夜わたしにやつたことを正直に書つたら、みんなドン引きすると思う。

それを怒つてちょっととしかとするくらい可愛いもんじやない。

「まあ、そうかもしれないけれど……。でも、あまりやりすぎると一人の仲に関わるかなつて思つて。できればはるかとカレヴィイ王は仲良くやつて欲しいし」

……うーん、そう言わるとなにも言えなくなつちゃうなあ。

千花はわたしの幸せのためにカレヴィイとくつつけようとしているんだし。

……仕方ない、ここは譲歩するか。

「分かつた。わたし後でカレヴィイに謝るよ」

確かに、結婚生活が始まる前から問題起つたりやまづいものね。カレヴィイのしたことには、今回だけは皿を回らつ。

「うん、そうした方がいいよ」

わたしの言葉にほつとしたように千花が頷く。

……それにしても、千花つていろいろ気遣いの出来るいい友達だなあ。わたしにはもつたいたいくらいい。

「……ハルカ様は見事な技術をお持ちですね。素晴らしいですわ。わたくしもなにかお手伝いすることができればよろしいのですけれど」

イヴェンヌがわたしの作業を見ながら溜息をついて言つてきたので、わたしはペン入れをする手を止めてうーん、と考えた。

まったくの初心者でも枠線引きとか消しゴムかけならできるかも。

「……もしよかつたら、やつてみる? それじゃ千花、ベタ塗りに

変わってくれるかな?」「

「うん、分かつた」

千花は頷くと、すでにペン入れし終わった原稿を魔法で乾かし、
×印の付いたところを筆で塗りつぶし始めた。

「え……、でもわたくしに出来るのでしょうか。足手まといにならなければよいのですが」

わたしの提案が彼女にとつては思いもかけないことだつたりして、イヴェンヌがうるたえる。

彼女はちょっと自信がなさそうだけど、枠線引き 자체はそう難しい作業じゃない。

そこでわたしは、紙にシャーペンで線を何本か引き、その上をペンでなぞらせて練習をすることにした。

「……出来ましたわ!」

千花の隣に座つて、じばりへ定規とペンで紙相手に格闘していたイヴェンヌは充実感で瞳をきらきらさせて言った。……「お、ちょっと眩しい。若いつていいね。

肝心の枠線の出来は……どれどれ。うん、きちんとシャーペンで描いた線の上を一発でなぞてるし、これなら合格かな。

それでわたしは原稿を一枚イヴェンヌに渡し、枠線引きを開始してもらつた。

それに時折、彼女の隣に座つている千花の的確なフォローが入り、イヴェンヌは少し緊張しながらも、綺麗に枠線を引いていた。

……ありがと、千花。さすが千花は気が利くなあ。

わたしは千花の存在をありがたく思いながらも、ペンを走らせる。千花は仕事が速いから、おちおちしてられないのだ。

「イヴェンヌばかりずるいですわ。わたくしもお手伝いしたいです」

ソフィアがそう言つと、モニークも負けじと言つ。

「わたくしもハルカ様のお役に立ちたいですわ

うーん、彼女達の気持ちは嬉しいけど、道具もそんなにないから枠線引きの練習してもらつわけにもいかないし。後は消しゴムかけぐらいしか残つてないな。

……今度元の世界に帰つたときは、もう少し、ペンとか定規とかも補充しておこう。

「……じゃあ、ソフィアは消しゴムかけして。モニーカは悪いけどイヴェンヌとソフィアの分の腕力バー持つててくれるかな。あとみんなのお茶淹れて。あ、モニーカの分もね」

わたしがそう言うと、ソフィアはぱつと顔を輝かせ、モニーカはがつかりしたような表情になつた。

う、あちらを立てればこちらが立たず。

でもモニーカには悪いけど、本当にやつてもらひつことがないんだよ。ごめんね。

「ごめんね。モニーカにも明日手伝つてもらつから。ソフィアは、わたしの隣に座つて。今から消しゴムかけしてもらつけど、紙を破らないように、文字の書いてあるところだけは残して綺麗に消して。……こんなふうに」

わたしは千花がベタ塗りして乾かしてくれた原稿に慎重に消しゴムをかけて手本を示した。

「分からなかつたら、声かけてね」

「はい、かしこまりました」

ソフィアは使命感に燃えた瞳で頷くと、教えた通り綺麗に消しゴムをかけてくれている。さすがに王宮付きの侍女だけあって、仕事が丁寧だ。

「腕力バー、頂いてまいりましたわ！」

そこで、一時わたしの居室から出ていたモニーカが戻つてきて、侍女二人に腕力バーを渡した。

すると、二人はわたしが指示するまでもなく、腕力バーを装着し

た。

見ると、モニー カも自分の分を確保しているようだ。腕力バーを大事に居室の隅っこに置いていた。

それで、モニー カにお茶を淹れてもらつてみんなでほつこつと休み。

そこで、今描いている話の前の話の原稿はないのかと侍女達に聞かれた。

「うん。 あるけど、向こうの世界に置いたままなんだ。 できるだけ早く持つてくるね」

三人がわたしの漫画を読みたいて言つてくれるのはすぐ嬉しけど、次はいつ向こうに帰れるかな。

「それなら、今日はるかの礼儀作法が終わつた後に向こうに行こうか。いろいろ入り用のものもあるだろうし」

千花がわたしの意向をくみ取つて、そつと言つてくれたからすくへ助かつた。

「あ、うん。 ありがと、千花」

「お礼なんていって。 わたしも向こうに用があるしね」

それでわたしは千花のありがたい言葉に乗ることにして、向こうに一時的に帰ることにした。

ああ、ほんとに助かつた。 嬉しい。

千花がいてくれて本当に良かつた。

「じゃあ、家から原稿持つてくるからね」

わたしが侍女達にそう伝えると、「まあ、嬉しいですわ」「楽しみですわー」「ええ、本当に」とうきつきしながらまた作業に入つていつた。

それを眺めていて、わたしはあることに気が付いた。

……そうすると、カレヴィにも向こうに一度帰るつて言つておかないといけないんだよね。

んー、お昼の時に彼に断つておけばいいかな。……わたしが無視したことでカレヴィの機嫌が悪くなればいいけど

わたしが手を止めてちょっとと考え込んでいると、消しゴムかけまで終わつた原稿を眺めていたモニー・カが聞いてきた。

「ハルカ様、これで完成なのですか？」

「ああ、まだ。トーン貼りとか写植とかが残つてるよ
わたしが簡単にトーン貼りと写植の説明をすると、侍女三人が感嘆したように溜息をついた。

「ハルカ様は随分と細かい作業が得意ですね」

「絵もお上手ですし」

「お話も素敵ですわ」

「……ありがとう」

侍女三人が口々に褒めてくれるので、わたしはちょっと照れながらも礼を言つた。

いやー、恥ずかしいけど、やっぱり褒められるのは素直に嬉しいね。

それに、三人の新たなアシスタント候補が増えたことも嬉しいし。
わたしがそう言つたら、千花にすかさず突つ込まれた。

「……はるか、王の婚約者付きの侍女だよ。そこは間違えちゃ駄目だよ」

う、そうだった。彼女たちは王宮付きの侍女だった。だとしたら、
そうそう荒使いはできないよなあ。

わたしがそう思つていたら、ソフィアが言つた。

「まあ、ティカ様、わたくしは侍女兼アシスタントがよいですわ
そうするとイヴェンヌも言つ。

「わたくしもそれがよいです。なんだかおもしろそうでわくわくしますわ」

「わたくし、ゼシリ亞様に正式に許可をいただきますわ。そうすれば、なにも問題ないでしょ」

モニー・カもわたくしや千花にこり笑いかけながら言つ。

……この三人、マジだよ。

マジでわたしのアシやる気だ。

わたしは感動しながら、千花はちょっと呆れながら三人を見ていた。

でもまあ、これで効率が上がつて趣味のサイトの更新頻度も上がつてめでたしめでたし、なのかなあ？

けど、その前にカレヴィの花嫁修業という難関が立ちふさがつてるけどね。

千花や侍女達と和氣あいあいとしていた時は過ぎて、今はお昼。千花をお昼に誘つたけど、ちょっと用があるからとこいつ理由で断られちゃつた。……しょほん。

「それより、はるかはカレヴィ王に早く謝つたほうがいいよ」という千花の言葉を受け、わたしは侍女経由でカレヴィに昼食の誘いをしてみた。

それに対して、カレヴィはすぐにお昼の用意してある共同の間までやつてきた。

「先程は俺を無視していたのに、どうこいつア見だ」わたしと向かい合つて座つたカレヴィは幾分機嫌悪そうにしていた。

「ありや～……。やつぱりわたし、彼の機嫌損ねちゃつたんだ。カレヴィは王様だし、他人に無視されるとこうことに慣れてないんだろうな。

そう考えれば、彼の機嫌が悪いのも分かる気がした。

「いや、それはやりすぎたよ。」こめんね

慌ててわたしがカレヴィに頭を下げるが、彼は不機嫌そうに言つてきつた。

「おまえがそんなに簡単に自分の考えを翻すと言つことは、おおかたティカ殿に諫められでもしたのだろう」

「うつ、カレヴィ鋭い。

思わずわたしが絶句してると、彼はふん、と皮肉げに笑つた。

思わずむつとしかけたけど、これじゃいけないと直して言つた。

「……千花にカレヴィと仲良くなつてほし」と言われたのは本当だ

よ

「おまえはティカ殿の言ひことなら聞くのか」

なんだ、やけにつつかつてくるなあ。

婚約者の自分が大事にされてないとでも思つてゐるのかな?

「だつて、千花の言ひことはいちいちもつともだし。これから嫌でもずっと顔を合わせることになるんだから、少しさわたしも譲歩しなきやと思つたんだ」

「……譲歩か。まあ、いい。食事が冷める。早く食べろ」

わたしはカレヴィに大皿の料理を取り分けてもらつたので、慌ててありがとうございましたとお礼を言つた。

「……ああ。そういうえば、おまえは昨夜のことを見つたらしいじゃないか。なんでもおれは優しくなかつたとな」

わたしはそれで、フォークにすくつていたポテトグラタンを皿にぽとつと落としてしまつた。

これじゃ動搖しているのがバレバレだ。

ふと周りを見ると、わたし付きの侍女達は少々心配そうに、カレヴィ付きの侍女達は興味津々にわたし達の様子を窺つてゐる。

「……」「じめん。そんなに気に障つた?」

つい、興奮してその場にいたみんなにそれっぽいことを言つちやつたけど、カレヴィの耳に入つたのはやつぱりまずかつたよね。

「当たり前だろう。そんなことくらい少しほは我慢しろ。……おかげで俺は女心の分からぬ王というそしりを受ける羽田になつたぞ」

そんなことくらい」と言つたので、わたしはかなりむつとしてしまつた。

カレヴィのしたことは初夜じや考へられないし、わたしに無理させたことは本当のことじやない。

それに、事實をみんなにぶちまけなかつただけでも自分を褒めてやりたいくらいだ。

「……事実じやない」

わたしが小声で言つと、カレヴィにじるつと睨まれた。

「なにか言つたか」

「……カレヴィは酷いよ。そんな言いぐさないじゃない。カレヴィはわたしがそれで体を壊しても構わないって言つんだね」

言いながら、思わずわたしはぽろぽろと涙をこぼしてしまった。慌ててわたしはハンカチでそれを拭い、ごまかすようにポテトグラタンを口にする。……熱い。

わたしはそれでまた涙目になる。

「そんなことは言つてないだろう。ハルカ、泣くな。……分かつた。俺が全面的に悪かった、許せ！ これでいいか！？」

最後の方はちょっとやけくそみたいに聞こえたけど、一応は謝つてるんだよね。……少しば反省しているならいいか。

「うん」

それでわたしはちょっとカレヴィに笑つた。

すると、カレヴィはちょっと田元を赤くして、料理が冷めるから早く食べると再度口にした。

それでわたしは、酸味の効いたソースがかかつた鳥の唐揚げをナイフとフォークで切り分けて口にする。

「……恐れながら陛下、ハルカ様は慣れない環境におられるのですから、あまり不安を煽られないようにお願ひいたします。護衛の者に伝え聞きましたが、ハルカ様はよく我慢なさったと思われますわ。陛下は詳細を侍女達に知らされなかつただけでも良しとされなければ、ぱちが当たります。陛下、どうかハルカ様を大切にされてくださいませ」

侍女長のゼシリアがそう言つたので、わたしは思わずぎょっとしてしまつた。見ると、カレヴィも心なしげざめている。

ひょつとして、ゼシリアには全部バレバレってこと？ 彼女の情報網はいつたいどうなつてるんだ。

「……まいったな。ハルカはこの短期間のうちに侍女達を掌握したのか。やりにくくてかなわん」

そう言いながら、カレヴィはソースのかかつた茹で野菜をフォー

クに刺して溜息をつく。

「うーん。掌握とかは違うと思うなあ。

こうなれば、女心の分からぬカレヴィの相手のわたしに対する同情心からだと思ひなごど。

でもわたしは、あえてそれをカレヴィには伝えなかつた。

それにしても、おまえに泣かれると調子が狂う、と言つて田元を染めて不機嫌そうに食事を進める彼がちょっとおもしろかつたからだ。

……うーん、こうしてみるとわたしって結構いい性格してるかも
しない。

「あ、そういうえば。今日の礼儀作法の授業が終わったら、千花と向こうに行つてくるね。晚餐の時には帰つてくるから」
カレヴィに買い物やら、家に取りに行くものがあるからと言つたら、結構簡単に了承してくれた。

なにか言われるかなあとthoughtしていたので、ちょっと一安心。
「だが、なるべく早く帰つてこいよ」

「うん、まあこれくらいは言われるよね。」

それにきっと心配してくれてるんだろうし、そう考えたらカレヴィ
イつて優しいな。

さつきの暴言はこれで帳消しにしておいた。

「うん、分かつた。ありがと、カレヴィ」
わたしはにつこり笑つて彼にお礼を言つた。
でも、千花がいるからなにも心配することはないんだけどね。

そして、カレヴィとの昼食を終えて迎えた、礼儀作法の初授業。
ああ、一番恐れていた時間が来ちゃつたよ。
千花からも、礼儀作法の先生は厳しいものと覚悟しておいた方が
いいよ、と言っていたので内心どきどきだ。
でも実際に現れたのは上品で優しい感じの先生だった。名前はシ
レネだつて。

「それではハルカ様、立つたまましばらく静止してみてください」
そうシレネ先生に言わされたので、わたしはその通りにしてみる。
すると、シレネ先生の細かいチェックが入つた。

「ハルカ様、頭が揺れてます。もう少し我慢してください」

そう言わなながら、肩の位置やら、立ち方やらの矯正が入る。

「あ、さつきよりは大丈夫な感じ。」

立ち方を直しただけで、結構違うものなんだなあ。

「……はい、今の姿勢がすべての基本ですから忘れないでくださいね。……それでは略式の礼の仕方に入ります」

略式の礼と言われて、わたしはこっちの礼の仕方をぜんぜん知らないことに気がついた。

……本當なら一番最初に習つておくべきものだよね、これって。わたしは自分の悠長さに内心冷や汗が出る思いだった。

シレネ先生に教えてもらつた略式の礼は、膝を軽く降り曲げつつスカートの両側を摘んで、小首を右に傾げるもの。ちなみにこれは大陸共通のものだそうだ。

わたしはそれを何度も繰り返した後、ようやく合格点をもらえた。

「それでは少し休憩にいたしましょうか」

その言葉ですっかり安心してしまったわたしは、いつも通りテーブル席に腰掛けたら、シレネ先生から座り方のチェックを受けてしまった。

う、これも礼儀作法の一環なんだね。

その後も、カップの持ち方やらなんやら指摘されて、それも正すように言われた。

……うーん、シレネ先生は礼儀作法の教師にしては優しい方なのかも知れないけれど、やっぱりチェックは厳しいや。

そして休憩という名の礼儀作法の時間がすぎて、本田のシレネ先生の授業は終了となつた。

「今日習つたことの復習を忘れないでくださいね」

「はい、ありがとうございました」

シレネ先生の礼に、わたしは習つた略式の礼で返す。

先生に何も言わていないので、たぶんうまくできているはずだ。わたしはシレネ先生を笑顔で見送つた後、こつそりと溜息をついた。

一応、あつちでは事務職で接客する」ともあつたから、そういうセミナーを受けたことはあるんだけど、やっぱり一回一回の付け焼

き刃じや駄目か。

そこで、テーブルマナー や礼の復習はカレヴィに見てもらいながらやううとわたしは決意する。……王であるカレヴィなら作法に関しては完璧だらうじ。

そんなことを思いつつ、長椅子に座つてくつろいでいたら千花がやつてきた。

これからあつちの世界で足りない画材の買い物があるので。……千花、お世話になります。

ちなみに、千花に礼儀作法の先生は割と優しかったと言つたら、千花、お世話になります。

……ひょっとしたら、千花の礼儀作法の先生は余程厳しかったのかもしれない。

それから千花にカレヴィとの例の夜の一件を話しておいた。

そしたら千花は「……ありえない」とショックを受けたようだつた。

カレヴィとの仲を千花が取り持つたようなものだし、悪いこと言つちゃつたかなあ。

でもその他の条件はそこぶるいいんだから、それくらいはわたしがちょっと我慢すれば……、う、うーん、我慢できるかなあ……。今更ながら不安になつてきた。

わたしは百均と画材屋で画材をしこたま買い込んだ後、スーパーに寄つてスナック菓子やお煎餅を千花と二人でたくさん買つた。

「向こうはお菓子つて言つたら、甘いものだもんね。だから時々塩気の利いたものが無性に食べたくなるよ」

千花のその言葉に、確かにあつちでは甘いものしか出てこなかつたなと思い返す。

とりあえず、今日買つたお菓子は明日のお茶受けに出しちゃひつことにしよう。

カレヴィイやイヴェンヌ達も珍しがるだらうな。ふふ。

わたしは大量の買い物袋を下げ、ザクトアリア城に戻り、そこで千花と分かれた。千花、今日は（も？）ありがと。

わたしが城に着いたのは既に晚餐の時間に近かつたんだけど、カレヴィイは共同の間にも部屋にもいなかつた。

まだ執務なのかなと思つたけど、ゼシリアが言うには謁見の間で貴族達と会つてゐるそうだ。

「ハルカ、やつと帰られましたか。すぐに着替えられて謁見の間まで来てください」

荷物を置いてちょっと一休みしようとしていたら、なぜかシルヴィが現れた。

いや、彼と会えるのは嬉しいけどさ。わざわざ彼が来るつてよっぽどのことなんぢやないの？

わたしは不安になりつつも、急いで支度をしてシルヴィの後についていく。

わたし達が謁見の間の控えの間に入ると、シルヴィに片手を差し出された。

それをわたしはおずおずと取ると、シルヴィに先導されて謁見の間の王妃の席がある場所まで連れてこられた。

……これはここに座れってことなのかな？

ちらりとカレヴィイを窺うと、彼は肯定するよう頷いた。

席に腰を掛けると、シルヴィが数歩退いて静止する。

落ち着いて周りを見てみると、貴族らしい人物が五名程怒りの表情でこちらを見ていた。

……え、え？ これはなに？

なんでわたしは見ず知らずの人達に敵意も露わに見られているの？

「これはこれは、こちらが陛下の婚約者殿ですか。これはまた……醜女をお選びとは陛下もお遊びが過ぎますぞ」

いきなり悪意を浴びせられて、わたしはびっくりしてしまった。

しかも、会つたばかりの人間のことを醜女つて酷すぎない？

「いきなりなんだ、バルア侯爵。それにハルカは醜女などではない」

隣のカレヴィイが不愉快そうに顔をしかめる。

「しかし、わたくしの家の姫はその者が足下にも及ばないほど美しいですよ」

「わたしの姫もです」

「もちろん、わたくしの姫も」

「我が姫も負けませんよ」

「なんの、わたしの姫は花のよう美しく」

日々に貴族のおじさん達がわたしを汚らわしいものでも見るかのようにして、自分の娘を自慢する。

「無礼な。ハルカは兄王が選んだ女性だ」

シルヴィイが憤慨して、貴族のおじさん達を睨みつける。

ああ、わたしのために怒つてくれてるんだね。いい子だなあ。

「俺は花嫁に美しさなど求めてはいない。……それにハルカはあの

最強の女魔術師の親しい友人だ。これほどの良縁もあるまい」

ちょっと酷い言いようにも聞こえるけど、カレヴィイにしたらこれが事実なんだろうな。

まあ、わたしも趣味三昧のために彼の王妃になることを決めたんだから、おたがいさまだ。

「しかし……！」この者は異世界の卑しい出ですぞ！」

「そうです！ 陛下がティアルスタンの王女と婚礼を挙げられると伺つていたからこそ、我々も堪え忍んできましたのに……っ」

確かにわたしはただの庶民だ。

それに隣国のリリーマリー王女の代役でカレヴィイの婚約者になつたから、王妃にふさわしい気品なんかも全然ない。

わたしが思わず下を向くと、カレヴィイがおとんとおかんに謁見した時みたいにわたしの手をそつと握ってきた。

それで、思わずわたしはカレヴィイの顔を見返してしまつ。

「　なにを言うか。」のハルカはそこの姫とは比べものにならないくらい良い女だぞ」

……はあ？

「」の事態にカレヴィイがどうにかしちゃったのかと思つて、わたしは思わず惚ける。

見ると、シルヴィもあつけに取られているじゃないか。

対する貴族のおじさん達も笑いを堪えるよつた表情をしてくる。

「陛下、『冗談を……』」

「冗談ではないぞ。昨夜のハルカとの習いは最高だつたぞ。それも今まで抱いたどの高級娼婦よりもな。おまえ達の姫がハルカにかなうとはとても思えんがな」

「ちょっ、カレヴィイきなりなにを言い出すかーー！」

わたしあはびっくりしすぎて思わず席を立つてしまつた。

シルヴィも真つ赤な顔で「」を見つめる。「う、う、氣まずい。

「なつ、なつ、な……つ」

貴族のおじさん達もカレヴィイのあまりの発言に顔を真つ赤にしている。

あれは怒りのためだらうか、それとも羞恥かな？……たぶん、

両方だらう。

「分かつたら帰れ。いい加減日障りだ」

冷たくカレヴィイに告げられた貴族のおじさん達が、その身を屈辱に震わせながら声を張り上げる。

「わつ、わたくし達はまだ諦めませんぞー！」

「必ずや卑しい娘から陛下をお救い致しますー！」

……「」と、それじゃわたしがカレヴィイをどうにかしているみたいじゃない。

「」と、わたしはカレヴィイの方をなんとかしたいと思つてゐるつて言うのに。

その他、叫びたいだけ叫んで、貴族のおじさん達は鼻息も荒く謁見の間から出ていった。

途端に静かになつた謁見の間で、わたしはカレヴィイの前に立つ。そして腰に手を当て顎を少し上げた。

「……ちょっと聞いていい？」

「……なんだ？」

ちょっと偉そうなわたしに、カレヴィイがちょっと引き気味になる。こんなことより、さつきのカレヴィイの発言の方がよっぽどドン引きでしようがあつ！

怒鳴りつけたいのを堪えつつ、わたしはなるべく静かに彼に尋ねる。

「花嫁候補の姫つて他にもいたんだ？」

「いや……、あれはやつらが勝手に言つてることで、俺にはその気はない」

でも、その気になれば妃はいくらでも娶れるんだよね。

わたしは昨夜の苦労を思い出して、思わず震え出す。

それをどう勘違いしたものか、カレヴィイが焦つたように言つた。「どうした、ハルカ。俺は、おまえ以外の妃は娶らないぞ。だから、おまえが王妃だ。安心しろ」

そう、なら安心……できるかーつ！

カレヴィイがあの調子で、わたしがずっとその相手をすることになるかと思うと、目の前が暗くなるような気がする。

カレヴィイもめんどくさがらずに寢妃を一、二人くらい娶つてくれれば、わたしは体力の限界に挑まなくすむんだよね。

そしたらあの貴族のおじさん達に変に敵視されずにするかもしないし。

……などと、わたしは千花が聞いたら「甘い、甘すぎるー」と突つ込みが入りそうなどをつらつらと考えていた。

「ほんとに信じられないっ！」

いろいろと考えている内にさつきの羞恥を再び思い出してしまつたわたしは、カレヴィイとシルヴィしかいなくなつた謁見の間で、年甲斐もなく真つ赤な顔で地団駄を踏んでいた。

「ハ、ハルカ落ち着け」

わたしの荒れようにはカレヴィイが慌てたように立ち上がる。シルヴィもわたしに近づいてきた。

「気持ちは分かりますが、ハルカ落ち着いてください。淑女らしくないですよ」

十歳以上年下なシルヴィに諫められて、わたしは自分が随分と大げなかつたことを恥じた。

……でも、やっぱりカレヴィイのことは許し難い。

「今日は夜の習いしない！」

わたしのその叫びにカレヴィイはかなり驚いたようだつた。

「なにを言つてはいる。そんな勝手が許せるか。それに、あれは褒めたんじやないか。なのに、なぜ怒る」

……あれを褒めたつて言えるカレヴィイおかしそぎるよ。

「あの言い方じゃ、まるでわたしがカレヴィイを惑わしてゐみたいじゃない。カレヴィイ、酷すぎるよ」

そう言つてゐるうちに、羞恥からじわりと涙が浮かんできた。

「ハルカ」

シルヴィイが心配そうにわたしに腕を延ばしてきただけど、はつとじたようにその手を引っ込めた。

「……なんだろう。ひょつとして慰めようとしてくれたのかな？」

「兄王申し訳ありません。出過ぎたまねをしました」

「……まあ、いい。だが、ハルカは俺の婚約者だということを忘れるな」

「はい」

今度はカレヴィイがわたしに腕を延ばってきて涙を拭おうとした。

……あ、あれってこういうことだったのか。

だけどわたしは、カレヴィイの腕をはねのけ、彼から数歩下がつて自分で涙を拭つた。

「……ハルカ、その態度は可愛くないぞ」

カレヴィイがむつとして言つてくるけど、わたしはまだ彼に怒つていた。

「カレヴィイが悪いんじょ。あんな恥ずかしいこと言つから。あの
人達、わたしのことまるで悪女かなにかみたいに言つてたじやない
」
あの人達が言つよう、わたしは確かに美しくない。でも、この
体は信じられないことにカレヴィイにとつてはとても貴重なものらし
いのだ。

でも、それを自分の姫を売り込みたい貴族の人達に誇示するよう
に言つなんて酷すぎるよ。

あれじや、無駄に敵を増やすだけじゃないか。

わたしはもつとひつそりと王妃業しながら趣味に浸りたいのに。
わたしがまだ真つ赤な顔でカレヴィイを睨んでいると、彼は仕方な
さそうに溜息をついた。

「……悪かった。俺の考えがなさすぎた。ハルカ、頼むから機嫌を
直してくれ」

謝つてきて、そんなに簡単には許さないからね。

わたしの平穏な日常を壊すような真似をしたカレヴィイは、もつと
根本的なところから考え方直したほうがいいと思う。

あれが、人前で言つていい言葉かどうかぐらい、普通分かるでし
ょうが。……あ、王様だから分からないのか？ でも、王族のシル
ヴィは普通にあれが非常識な会話だと理解しているみたいだし。
うん、やっぱリカレヴィイがおかしいんだ。

結局そういう結論に落ち着いて、わたしはカレヴィイの懇願にも黙
つっていた。

「ハルカ、俺からも頼みます。どうか機嫌を直してください」「う、シルヴィにそう言われちゃうと、決意が鈍るな。

あんまり意固地になつて、彼に悪印象持たれたら嫌だし。

……仕方ない。ここは彼に免じて、カレヴィを許しちゃうか。

「……分かったよ。でも、カレヴィはもう人前であんなこと言わないで。わたしはすぐ恥ずかしかったんだからね」「ああ、すまない」

軽く返してくるカレヴィにちょっと、いやかなり不満を感じる。

本当に分かってるのか、この男は。

わたしは頭が痛くなりながらも、シルヴィの再三のフォローを受けて、仕方なくカレヴィを許した。

心配してくるシルヴィの顔を立てるために、今回は許したんだからね！ そのところは勘違いしないでよね。

それでとりあえず、時間も遅くなつたことだし、晚餐ということになつた。

わたしがシルヴィも一緒にと言つたので彼も同席している。義弟として仲良くなる機会をどんどん作つて行かなくちゃね。ふふ。

その席で、カレヴィに礼儀作法の授業のことについて聞かれたので、わたしはその内容をざつと説明した。

「千花に礼儀作法の先生は厳しいから覚悟しておいた方がいいって聞かされてたからどうなるかと思ってたけど、実際は優しい先生でよかつたよ」

ステーキを切り分けながら笑顔で言つと、カレヴィがとんでもないことを言いだした。

「そうか。……おまえにはもっと厳しい教師を付けた方がよかつたか？」

「え、えつ？ いや、今まで結構です！」

「……冗談だ」

見ると、カレヴィイはおかしそうに口元を押さえている。

「つ、おもしろがられてるよ、わたし。ひょっとして、これはさつきの仕返しか？」

「けれど、ハルカと教師の相性が良さそうによかつたですね。よい信頼関係を作つていいくのも作法を教わるには大事です」

「うん、そうだね」

それは本当にそう思う。

チエックは厳しいけれど、優しくて信頼できる先生だし、わたしは本当に運がいい。

シルヴィにこにこしながら、わたしは頷く。

「なんだ、ハルカはシルヴィには随分と愛想がいいんだな」

意外そうに眉を上げてカレヴィイが言つたので、わたしは素直に話した。

「わたし、弟が欲しかつたから、シルヴィとは仲良くなりたいんだよね」

「そ、ですか……」

シルヴィがわたしの言葉を受けてちょっと困つたように頷く。

あれ、迷惑だつたのかなあ……。

「まあ、程々にしておけよ。それこそ、先程のやつらに妙な噂を立てられかねん」

ええ？ 弟として仲良くするだけなのに、そんな心配をしなきゃいけないなんてかなり残念すぎる。

「これだけ歳が離れていたらそんな気になるはずないのにねえ。わたしにはシルヴィは可愛い弟みたいに思えるけど」

まあ、公式には二十歳ということになつていいから、あの貴族のおじさん達にそう言えないところは苦しいかな。

すると、シルヴィがいかにも気分を害したとでもいうように、むつとした顔をしてきた。

あ、あれ……？

「失礼ですが、俺はもう成人しているんです。あなたの相手として

噂される可能性はいくらもあるんですよ。それなのに、そんなことを言わるのは心外です」

「あ、そうだった。ここでは十五で成人なんだつた。だから、その可能性は確かにあるんだよね。わたしからしたら、それが犯罪的行為だとしても。

「ご、ごめんね。シルヴィのプライドを傷つけるつもりはなかつたんだ。許してね」

わたしが頭を下げて謝つたら、シルヴィはちょっと息をついて、首を横に振つた。

「……俺も言い過ぎました。ただ、本当にやつらに妙な言いがかりをつけられるようなことには気をつけてください」

「う、うん、分かつた。気をつける」

なんだかわたしもカレヴィを怒るような感じじやなくなつてきたな。

シルヴィとは仲良くしたいけど、本当に気をつけないと。……けどその程々具合が難しいんだよねえ。

わたしはちよつと息をついた後、気を取り直すようにカレヴィに礼儀作法の復習のことについて言つてみた。

「ところで、礼儀作法の先生に今日習つたことの復習してくださいつて言われたんだよね。だから、カレヴィ後でわたしがきちんと出来ているか見てほしいんだけど」

「ああ、いいぞ。しっかり見てやる」

それまでシルヴィとのやりとりを黙つて見ていたカレヴィが、わたしのそのお願いに笑顔で快諾してくれた。

「うーん、カレヴィ、いい人だ。……時々かなり非常識だけど。」

「その代わり、おまえには夜の方も頑張つてもううだ」

……結局そのオチか！

恥ずかしげもなく言うカレヴィに、ウブなシルヴィが真つ赤にな

る。

カレヴィ、やつきのこと全然反省しないじゃない。

いい人と思ったのは撤回。カレヴィイは王様の皮を被つた野獸だ。

「……なら、侍女達に見てもらつからいいよ」

昨日みたいなこと、また繰り返すのは耐えられない。

わたしの体力だって限界つてものがあるんだぞ。

「礼儀作法なら俺が見た方が確実だぞ。遠慮するな」

そんなこんなでカレヴィイに押し切られたわたしは、礼儀作法の復習を彼に見てもらうことになった。

シルヴィイはあの話題に引いたのか、食事もそこそこに、そそくさと帰ってしまった。

……彼には本当に悪いことしちゃつたなあ。これもあけすけすぎるカレヴィイが悪いんだ。

でも、カレヴィイの礼儀作法は完璧で、確かにその人選は間違つてなかつたんだけど。

「……約束は守つてもらつぞ」

とかなんとか言われて、寝室で彼にのしかかられてしまった。

……よくよく考えたら、復習を見てもらうのはシルヴィイでも良かつたんじゃない？ 彼も王族で礼儀作法は完璧なはずだし。

そうカレヴィイに言つたら、なぜか急に不機嫌になつてアレを何回も付き合わされることになつてしまつたのだった。

……本当に、なんでなんだ。

外が明るい。

「……ハルカ、朝だぞ」

耳元でゾクゾクするような美声が響く。
こんないい声の知り合いなんかいたつて、とわたしは寝起きの働かない頭で考える。

ふと、隣で人が起き出す気配がした。……ああそうだ、カレヴィイだ。

段々頭が冴えてきたけど、わたしはシーツにくるまつたまま彼を観察する。

初めて会った時も思つたけど、本当に美形だよねえ……。
それに、浅黒い体は引き締まつていて、すくなく綺麗な筋肉の付き方をしている。

腹筋とか割れてるし、ああ、今すぐカレヴィイを『テッサン』したい。
ああ、なんでスケッチブック置いとかなかつたのかな、わたし。
今夜からはちゃんと用意しておこう。
それでいろいろポーズ取つてもいいんだ。

「……カレヴィイ」

自分で思つていたよりもけだるい声が出て、それにカレヴィイが反応する。

「なんだ」

「カレヴィイつて、いい体してるよね」

褒めたのにカレヴィイは目をむいて絶句。

……あれ？ わたしはなにかいけないとでも言つただろうか。

「……おまえは俺を誘つてゐるのか？」

「えつ、えつ？ 違つよ、綺麗な体だからトシサンをせてもいいね」
と……んうつ」

今まで言わないうちにカレヴィイが覆い被さつて、わたしに口づけてきた。

彼の舌がわたしの唇の間から侵入してきて、逃げようとする舌を捉えられた。

「ん……つ、ちが……、『」かい……つだつて……ば」

口腔内を犯されて頭がぼうつとしてくるほど、それでもなんとかそう言つた。

「のままでは一日連續で朝からされてしまう」

「……そうだとしても、もう遅い。ハルカ、覚悟するんだな」

カレヴィイはふつと笑うと、今度は唇に軽いキスをしてきた。

ええー、嫌だよ朝つぱらから。

そして、カレヴィイはわたしにかかつっていたシーツをはぎ取ると、嫌がるわたしを無理矢理襲つた。

それからしばらくして、わたしはカレヴィイと一緒に共同の間で朝食を取つていた。

「……もう、信じられない。嫌だつて言つたのに」

一日連續で朝からやられてしまつたわたしは、またも不機嫌だつた。

「すまない。ハルカがそんなに嫌だとは思わなかつたんだ」

実はカレヴィイは、わたしが誘つたものの、照れて嫌がつてている振りをしていると思いこんでいたらしい。

「それに、なんで朝つぱらからなの？ 夜さんざんしたじゃない」
かつたるいし、また腰も痛い。

でも、礼儀作法の授業で動けないのはまずい。一応腰に湿布をしてあるけど、時間まで痛みが引けばいいんだけど。

まつたく、加減ということを知らないのか、この男は。

「……それは朝だからだ」

「……はあ?」

カレヴィの気まずそうな言葉に、わたしは一瞬目が点になる。

「朝……? ……ああ、分かった。そういうことね」

そこでようやく、カレヴィの言いたいことが分かったわたしは納得して頷いた。

でもアレって放つておけば元に戻るんじゃないの? わざわざわたくしとやることもないのに。

「……そんなに持て余してゐるなら、娼館の人を呼んで相手してもらつたら? いくら花嫁修業とはいえ、毎日こんな調子じゃわたしの体力が持たないよ」

カレヴィがわたし以外の妃を娶らないと宣言している以上、野獣をおとなしくさせる解決策はそれくらいしか思いつかない。

なにせわたしは、特に運動もしていないただのオタクな女なのだ。ただ、昔から体だけは丈夫で、滅多に風邪も引かないんだけどね。それに対しても、カレヴィはちょっとむつとしたように言い返してきた。

「おまえという婚約者がいるのに、そんな不実な真似が出来るか? ……これ、聞く人によつちや、感動ものの台詞なんだろうな。

現に部屋の隅に控えていた年若い侍女達がきやあつ、と嬉しそうな声を上げている。

だけどわたしはそれに動じることもなく、焼きたてのパンにバターを塗つていた。……「ごめんね、こんな枯れた女で。

でもそうなると、こんな毎日がこれからも続くつてことだよね。本当に、頼むから程々にしてくれないかなあ。

「……そういえば、こうこうとしてて婚約期間中に子供が出来たりしないの? それって、あんまり外聞がよくないような気がするんだけど」

わたしは常々聞こうと思つていた質問をカレヴィイに投げかける。
まあ、一ヶ月くらいなら誤差の範囲だつて言つて、こまかせるかもしれないけど。

「おまえは知らなかつたのか？　この期間中は俺が避妊の薬を飲んでいるから、子は出来ない」

……なんと。

初めて知らされる事実に私は目を見開いた。
なんで、夜の習いとか、避妊薬のこととか、誰も教えてくれないかなあーっ。

もしかして、みんなはカレヴィイが既にわたしに伝えているものと思つてゐるかもしねり。

カレヴィイが言つには、この期間は婚約中の一人のお楽しみ期間でもあるんだつて。……でも、主に楽しんでるのはカレヴィイのような気がしないでもないけど。

「ふーん、そうなんだ。まあ、朝からこんな話題もなんだし、もうやめるね」

わたしがそう言つたら、カレヴィイは明らかにほつとしたような顔になつた。

カレヴィイ、昨日の再現になるとでも思つていたのかな？　でもいくらわたしだつて、同じ過ちは繰り返さないよ。

わたしはふわふわのオムレツを味わいながら、そんなことを考える。

「ハルカ、この食事が終わつたら庭園に散策にでも行かないか？
確か王宮の外を見たことはなかつただろう」

……そう言つてみれば、見たことない。

カレヴィイが急にこんなことを言い出したのは、朝のアレの罪滅ぼしのつもりなのかな。

ここに来て日も短いし、わたしはインドア派だから特に気にしたことなかつたけど、でも、せつかくカレヴィイがこう言つてくれてるんだし、断る理由もない。

それでわたしが頷くと、カレヴィは楽しみにしておけ、と爽やかに笑った。

「」の笑顔だけ見ていたら、実は夜は野獣だなんて誰も思わないだろ。

……なにを隠そう、わたしもこの笑顔に騙された口だ。

千花あたりも、わたしからカレヴィの生態を聞いて驚いていたから、普段は出来る王様なんだろう。

……それが、夜の時だけアレなのはなんでなんだ。

それに変に義理堅くて、姫妃や娼婦を相手にするのは嫌だと黙りてくる。

そして、どうやらそれを聞いたわたしが喜ぶと思っている節があるんだよね。……まあ、日本が一夫多妻制じゃないって聞いていることもあるんだろうけど。

おまけにカレヴィはなんだかわたしの体を気に入っちゃってるみたいだし、本当に彼の趣味が分からぬ。

子供を作るのは契約だからまだいいとして、こんなハードなのは全然求めてない。はつきり言つて、王妃になる前からオーバーワークだ。

そうだ。今度、千花に精力減退の魔法薬でもないか聞いてみよう。うん、そうしよう。

わたしはそこまで考えて、カレヴィににっこり笑つた。

……傍目には婚約者同士仲良く話しているように見えるかもしれない。けれど、その一方が考えてこることは、ちょっと不穏なことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653ba/>

王様と喪女

2012年1月8日21時53分発行